優しい魔王の疲れる日々

n

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
優しい魔王の疲れる日々

【Ｎコード】
Ｎ１５２７Ｘ

【作者名】
ｎ

【あらすじ】
望月鋳鶴、中学三年生。見た目は背の高いイケメン？しかし魔王。超横暴母と秋葉原の神と称される父を持ちその父母にも引けををとらない姉６人と妹２人を抱えている。基本ヘタレで駄目っぽく見えるがやる時はやる男の子。そんな若干不幸？女たらし？で若干リア充？の主人公が色んな人と分かり合ったり。熱血したり。ラブコメその他もろもろな物語・・・

第1話：魔王の朝（前書き）

nと申します。初めて小説書かせていただきます。誤字脱字あるかもしれませんが、僕の小説で笑ってくれたり楽しんでくれたりしてくれたら幸いです。

第1話：魔王の朝

魔王兼、一応主人公、望月鋳鶴の朝、それは四時から始まる。

「早くお弁当作らないと・・・みんな起きちゃう」

まずはお弁当作り、彼の朝はここから始まる。
なぜ四時からというと、彼の家族は8女1男の9人姉弟、父母をあわせれば11人となる。
しかし、母と父は仕事が忙しいため中々帰ってこないのだ・・・
そして姉妹達は家事をしないだから彼が仕方なく家事をしているのだ。
次に昨日の夕飯の食器洗い、洗濯、朝食作りを進める。
そしてどうこうしてるうちに朝の7時、姉妹達が朝ご飯を食べに来る。

「恐子姉おはよう♪」

「おはよ・・・」

一番最初に起きてきたのは長女の恐子さん。

彼女は元ヤンの総長です♪
現在26歳ファミレスの店長をしています。
朝起きたばかりの目付きでも一般人には睨んでる様にしか見えません。

「飯はできてるかな？」

「杏奈姉、おはよう♪」

このいかにもガリ勉なメガネは次女の杏奈さん彼氏居ない歴２５年、弁護士なのに彼氏もできないとは・・・ある意味可哀想な人です。

「あぁ～・・・眠～・・・・」

「鶴君おはようございます♪」

「穂詰姉、梓姉おはよう♪」

あぁ～・・・眠～・・・とか言ってるのは三女の穂詰さん、昨日のお酒が残っているそうです。しかし！
ただの飲んだくれかと思いきやきちんとした保健の先生なのです。
こんな人でも教師・・・日本はどうなるんでしょうか・・・

そんな彼女の横にいる優しそうなお姉さん。
彼女は五女の梓さん、２０歳にして望月家で一番頭がいい人です。
現在は夏休みでアメリカのある大学から帰ってきています。

「お姉ちゃん！起きなきゃダメだよ！朝ご飯冷めちゃうよ～・・・」

「後五分～・・・後五分～・・・」

急いで支度しているのは末っ子八女の神奈ちゃん、七人姉妹の中では１．２を争うぐらいの鋳鶴君を愛しています♪
家族としてですよ・・・？
そしてようやくみなさんが食卓につきご飯を食べ始めました

「お兄ちゃん！お兄ちゃん！見て見て！」

「ん？」

「私のこの手が光って唸る！みそ汁投げろと！輝き叫ぶ！」

「ゆりみそ汁投げフィンガー！」

「えっ！？みそ汁！？」

今、鋳鶴君に意味不明などこぞのアニメの技みたいのを叫んでるのは七女のゆりさんです。彼女はギターとアニメやゲームが大好き♪望月家一番の元気っ子です。
あらら・・・鋳鶴君はみそ汁まみれ、それを尻目にゆりさんはご飯にガッツいてます。
味噌汁の着いた服を洗濯機に入れてきた鋳鶴君、すると？

「ふっ！なら私は結フィンガー！」

「うべふっ！」

思いっきり吹っ飛ばされる主人公こんなのが主人公ですいませんねぇ。
いきなり鋳鶴君をなんとかフィンガー！とか言って吹っ飛ばしたのは、
六女の結さん、高校生とは思えんダイナマイトボディ・・・
なんともけしからん・・・彼女は剣道女子で去年の高校二年生の時、全日本女子高生剣道大会でみごと全国優勝をなしとげたものすごい人です。
しかし・・・ブラコンと言う欠点がありますはい・・・そりゃあすごいですよ？はい・・・

そんな事からいっぺん結さんは倒れた鋳鶴君を見て・・・

「つ～くんごめんね・・・？痛かったよね・・・？大丈夫・・・？」

ギュッと鋳鶴君を抱きしめてあげています。

「いっ！息が！死ぬ！死ぬ！」

鼻血ぶっぱなしながら悶え苦しむ鋳鶴君・・・結さんは気づいていません・・・

別に羨ましいとか、リア充爆発しろぉぉぉぉ！とか思ってませんからね？

ホントですヨ・・・・・・？

そんなこんなで朝っぱらから死にかけてる主人公の鋳鶴君。

本当に爆発すればいいのに・・・と思わず！

我等が主人公鋳鶴君は復活するのか！

復活しなきゃ続きません！

以上空の声でした～♪

第1話：魔王の朝（後書き）

優しい魔王の疲れる日々第一話いかがだったでしょうか・・・？感想などがもらえたら嬉しいなと思っています。第二話は現在作成中です！皆さんもどうかこのリア充・・・じゃなかった！鋳鶴君を応援してあげてください！

第2話：魔王の登校（前書き）

全話で話した通りまぁお人好しな魔王兼主人公望月鋳鶴君、そんな彼は登校でも・・・

第2話：魔王の登校

「ふぅ～・・・やっと片付いた～そろそろ学校に行かなくちゃな・・・」

朝から色んな意味で大変だった鋳鶴君、今から学校に行くところです。

今日も普通に学校に向かおうとしていると、

「おっーす！鋳鶴！また鼻血ぶっぱなしたか？どうせまたいつものなんだろ？」

この赤髪で見た目がヤンキーそうな子は赤神桧人君これでも彼女が居ます、

一見はヤンキーですが中身はとても素晴らしい男の中の男なのです。

「桧人・・・鋳鶴は悪くない・・・多分姉妹達に色々されたんだろう・・・なんと羨ましい・・・」

「どっ！どうせまたえっちい事をしたのだろう！」

桧人君の隣に居る背が低く影の薄そうな子は土村影人君、この影の薄さを利用して様々な中学生ばなれした行動をするのですがその行動はまた今度紹介しましょう♪

そして後ろから鋳鶴君を顔を赤くしながら罵倒しているポニーテールは鋳鶴君の隣の家に住んでいるいわゆる幼なじみ三河歩さんです。

顔を赤くしながら怒るとは♪実に可愛いですはい♪

そして歩さんに怒られている鋳鶴君、羨ましいような、なんというか・・・・

「おい！今日から新学期なのに初日から遅刻はできねぇ！早く行くぞ！」

みんなを急がせる桧人君、彼らはもう三年生、今年で最後の中学生です。

それに今日は4月の始業式、初日から遅刻しそうだなんて・・・へタレにも程があります。

鋳鶴君は登校も大変なのです・・・
「鋳鶴！岡崎に殺されたくなかったら死ぬ気で走れ！」
「えぇ！？死ぬの！？それって教員のすることじゃないよ！？」
「速く・・・走れ・・・！」
「私が遅刻する訳にはいかん！鋳鶴お前も付き合え！」
「えっ！？待ってー！」
朝そして登校・・・幼なじみ、実に羨ましい！
そして四人は学校に急ぎ走り出しました。

第2話：魔王の登校（後書き）

第二話！どうだったでしょうか！まだまだ未熟者ですしページ数も少ないです
しかし！まだまだ頑張っていきたいと思います！感想お待ちしております！

n

第3話：魔王、進級・三年生（前書き）

朝から遅刻ダッシュの魔王兼主人公の望月鋳鶴そんな彼は進級・・・
したのだが・・・

第3話：魔王、進級・三年生

「いやぁ～間に合った、間に合った～・・・あ～疲れる・・・」

汗を拭く桧人君、実に男前です。

「ふっ・・・体力がもたな・・・い・・・！」

そんな後ろで、情けなく死にかけているのは影太君、実に滑稽ですね♪

「どうした！私は息なんかあがらんぞ！？お前等男だろ！しっかりしろ！」

男共三人が走り疲れてる中ポニーテール幼なじみの歩さん彼女は走りすぎたせいか服がシワシワです。

鋳鶴君ですか？歩さんの隣で立て膝で立ちつくしています♪

「得に鋳鶴！お前はなんだ！だらしない！」

「だっ・・・だって・・・歩がはっ・・・速いんだよ・・・」

そんな言い訳をする鋳鶴君を見て歩さんはガックリと肩を落としています・・・

まぁ・・・うちの主人公はヘタレですしね～・・・

「体育館に行くぞ！早く！」

男三人を急がせる歩さん、男三人が情けない・・・

そんなこんなで体育館で始業式、まぁ三人汗だくですけど・・・

始業式をしている間４人が通ってる学校の説明をしましょう♪

別に暇って訳じゃないんですよ・・・？ホントですよ？
そんな４人が通うこの学校、
「市立陽明学園」
ちなみにこの学校大学部・高等部・中等部があります。
そしてその敷地面積は愛知県の７分の４が陽明学園でその規模名声共に全国一位、
そしてなによりその中の選択科の多さです。
この陽明学園には、魔法科・科学科・機械科・普通科・銃器科・魔王科などがあり、その中でも魔王科は一般生徒は立ち寄れません、危険ですからね～♪
でも影人メモによると魔王科は女の子パラダイスだそうです！
さすがエロフェッショナル！
そしてなんだかんだで始業式は終わり。

「ほぉ～今年は４人同じクラスか～♪楽しみだな～♪」

「最後の一年で４人一緒か～」

「このクラス・・・良い・・・！」

「どうなる事やら・・・」

うきうきしてるバカ三人とあぁどうしよう・・・という感じのポニーテールが１人、
はてさていったいどうなる事やら・・・

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――

エロフェッショナル俳句

ミニスカは、男のロマンの、第一線！

影太

第3話：魔王、進級・三年生（後書き）

第三話・・・いかがだったでしょうか！まだ三話目もっとバリバリ書きたいです！
エロフェッショナル影太俳句・・・もしかしたらまたやるかもしれません！
ではまた四話で～

第４話：魔王と遅刻して来たスケバン、荒神さん（前書き）

赤神君の彼女？が登場！そしてホームルームからいきなり遅刻者が！？そこに現れたのは土村君と縁の深いスケバンさんでした。

第４話：魔王と遅刻して来たスケバン、荒神さん

四人が始業式を終え帰ってきましたすると・・・

「桧人～♪遅れそうだったんだって～？本当に馬鹿だよねぇ～」

「はぁ！？仕方ねぇだろ！俺は忙しいんだ！ほら！てめぇは６組だろ！ほら行った行った！」

「今年は桧人と別かぁ～寂しいな・・・」

ショートヘアーのあの子は６組の鈴村詠歌さんとってもスポーティーな女の子、桧人君の幼なじみで、
付き合いは幼稚園からです。いやぁ・・・羨ましいったらありゃしない・・・
そんな桧人君の彼女の鈴村さんは１組にとって強敵です。なにせスポーツ万能なのですから！

「今年はお前無しで球技大会、体育大会、優勝してやるぜ！」

「へぇ～♪じゃあ楽しみに待ってるよ♪」

笑いながら６組に戻る鈴村さん、実にたのしみという感じです。
そんな後ろ姿を見ている桧人君、ぶっ倒すぞ！というオーラがバンバンでています。
四人はクラスに入り席に着くと・・・？
そして先生がきました。

「席に着いてくだ～い！えぇ～コホン！今日からこの三年一組の

担任になります！白鳥要です！担任1年目ですが、どうぞよろしくね♪」

土村君の眼光が半端じゃありません！影太ＡＩがバリバリ働いています！

「あら？席が一つ空いてますね？荒神麗花さんですか？」

土村君が尋常じゃないくらい焦っています。
どうしたんでしょうか？
その時、バン！と音を立てて教室の扉が開きました。

「荒神だ・・・」

そこには見るからに赤神君と同じ雰囲気のスケバン少女が仁王立ちしながらどーんと構えています。
遅刻した人とは思えないぐらいのオラオラオーラ的なものが出ています・・・

「席は・・・土村君の隣ですね。」

あまりにものオーラで先生もびびっちゃってます・・・
土村君の顔色が真っ青です。お腹でも痛いのでしょうか？

「土村ぁまた同じクラスだな！赤神に望月、歩までいんじゃねぇか♪今年も宜しくな！」

「疫病神・・・」

「あぁ！？今なんつった！！」

土村君スケバン相手に「疫病神・・・」って・・・流石エロフェッショナル覚悟があります。
このスケバンさんは荒神麗花さん・・・はい、そうです。彼女は不良です。でも本当はピュアな女の子なんです。本当ですよ？
そんなこんなで先生があたふたしている中、土村君は荒神さんに胸ぐら捕まれてます・・・お気の毒に、
そんなこんなでホームルームも終わり荒神さんを加えて5人しか居ない教室で何が始まる事やら・・・

第４話：魔王と遅刻して来たスケバン、荒神さん（後書き）

優しい魔王の疲れる日々、第４話いかがだったでしょうか。縁の深いと書きましたがまたそれは番外編？で、感想などお願いします・・・！来週テストなので、来週は書けるかどうか・・・

第５話：魔王と４人の作戦会議（前書き）

ついに主要メンバーがそろった？球技大会までもう少し、三年生初めての学年競技しかしそれは、始業式から１０日後・・・そこで赤神＜あかがみ＞君からの作戦が・・・？

第5話：魔王と4人の作戦会議

「さぁて・・・あと十日で球技大会か・・・はえぇな、今年は確か・・・」

「野球・・・」

話始めた赤神君に土村君が割り込みます。

「そうか～、野球か・・・最低9人は必要だな・・・俺達が狙うのは優勝だ！その為に作戦をたてた！」

「桧人！まさルール違グボァ！！！！！」

赤神君に殴り跳ばされる鋳鶴＜いづる＞君、４，５Ｍは飛びましたね～、さすが不良！

「これはルール違反じゃない！正当な作戦だ！ほら、ルールブックを見てみろ。」

自信満々とルールブックをみんなに見せる赤神君、どんな事が書いてあるのでしょうか？

～第三学年普通科球技大会について～

・競技は野球です。

・大会は5日間行われます。一日一試合、計五回戦となります。

・各クラス9人を男女問わず選出して下さい。

・機材への細工、改造等は決して行わないでください。

・バット、ボール、クラブ、ユニフォームは学校側が当日用意させていただきます。
・金属物検査などを試合前に行わせていただきます。
・乱闘等は両チーム出場停止となりますのでご了承下さい。
注意：バッティンググローブは希望者のみ貸し出しします。

「だ、そうだ。」

「んで？だからどうしたんだ？」

荒神＜あらがみ＞さんが聞き返します。

「お前等、気づかないのか？このルールブックの抜け穴に。」

「抜け穴？そんなものあるのか？」

三河さん＜みかわ＞さんは頭に？を浮かべています。

「む・・・！飲み物・・・！」

土村君がハッ！とした顔をします。

「そうだ、飲み物だ！さすがエロフェッショナル！」

「エロは余計・・・」

ポカ～ンとしている三人、思いついてウキウキしている一人、ブツブツ言ってるエロフェッショナル。

「お前等、まだ分からないのか？飲み物に細工するのさ！」

「えっ？でも細工はダメじゃ・・・」

あたふたしている鋳鶴君、それを見てため息をつく赤神君、仕方ねぇな～と言わんばかりのため息です。

「飲み物は機材じゃねぇ！個人またはクラスで用意する物だ！それに細工しようと改造しようと！俺達の自由だろ！！！！！スポーツドリンク入れようが炭酸飲料入れようが自己責任！つまりこっちの自由ってこった！！」

卑怯です！下劣です！最低です！彼女持ちとは思えない悪業っぷりです。

土村君もコクコクとうなずきます。

「さぁお前等耳を貸せ！これから１０日間俺含めお前等４人には任務がある！それを今から伝える、各自耳を貸せ。」

なにやら色々な作戦を思いついた赤神君、さた１０日後の球技大会にむけてなにをするのか・・・

「さぁ！後はクラスの連中にも作戦を言い渡す！実行は今日からか明日からでも良い物もある。それじゃあ各自解散！」

それぞれ五人が任務を言い渡され帰宅していきます。

土村君は荒神さんと帰るらしいです。土村君はとてつもなく嫌がっていますけど、

「ほら！影太＜えいた＞！行くぞ！」

力強く土村君を連れて行く荒神さん、
そして、我らが主人公、鋳鶴君は三河さんと帰るそうです♪青春ですね～♪

「十日後の前ににもきちんと授業はあるからな！・・・その・・・一緒に帰らないか・・・？」

「一緒に？別にいいけど？たまには二人で帰るのもいいしね。」

別にって！色んな意味で乙女心を理解してほしいと思う、三河さんでした♪
ウチの主人公は鈍感だな～と思う空の声でした～

第5話：魔王と4人の作戦会議（後書き）

第5話いかがだったでしょうか？感想いただけたら感激で泣きますｗｗ

それではまた次回の六話で～

第６話：魔王と球技大会（前書き）

早くも１０日間がすぎ、球技大会に・・・果たして赤神君の策は成功するのか！

そして我らが主人公、望月＜もちづき＞君の活躍はあるのか！

第6話：魔王と球技大会

「さぁて！お前等！これから俺達は、球技大会という学園の競技に参加する！そこでだ！まずはこの球技大会に出る勇気ある9人を紹介する！」

教卓で大声を出しながら張り切る赤神＜あかがみ＞君、まさにやるぞー！っていう感じです。
そしてグラウンドに普通科中等部3年生が集まります。
開会式、普通科校長の長ったらし～挨拶を聞き終え

「エロフェッショナル！この大会の優勝かビリかはお前に掛かってる。絶対にしくじるなよ！」

「任せろ・・・後エロでは無くプロ・・・」

ボソッと呟く影太君＜えいた＞君、もうどっちでも良いと思いますがねぇ？
そしてだい一回戦、
2組対4組
あら？どうしたんでしょう、どちらも出てきません、

「なっ！腹が！腹がぁ！」

「しっしぬ！死ぬぅぅぅぅぅ！」

あらら～・・・どうやら下剤か何か入っていたそうですね～・・・
2組も4組も男子生徒だけがのたうちまわっています。

「女子に手を出すほど・・・落ちちゃいない・・・」

あっ下剤を入れた犯人はエロフェッショナルだったそうです～♪それを見ながらうんうんと頷く赤神君、
まさにゲスの極みです。こうして2組と4組は試合続行不可能となり、失格となってしまいました。
この珍事で、一時中断という事になり、そして二回戦3組対5組になりました。

「おい！てめぇ！どういう事だぁ！？俺達の水筒に下剤入れやがって！」

「はぁぁ！？それはこっちの台詞だ！てめぇらぁ！」

あらあら・・・喧嘩が始まってしまいましたね～・・・それにしてもあの赤神君の顔、悪の総大将のような恐ろしくゲスな顔です。奴に彼女など与えた神様が実に愚かに思えます。

「さすがだな、エロフェッショナル！最高の出来だ！さぁ！後は6組を落とすだけだ！！！！」

「このくらい・・・当然・・・」

フン、と鼻から息を出す影太君、そして3組と4組は乱闘退場ルールで失格残るは6組と1組となりました。そして6組にも作戦を決行したそうです。不戦勝で優勝しようだなんで、まさに最低ですね、この男はウジ虫イかです。そんなもう優勝はもらったなという感じで高笑いしてる赤神君、
すると・・・？

「へぇ～♪桧人～♪作戦は練ったんだ～でも・・・私達には通用しないよ？」

クラス用の水筒の飲み物をドブに捨てる鈴村＜すずむら＞さん、

「さすがだな、お前には通用しなかったか・・・詠歌＜えいか＞！全力できやがれ！」

早くも火花が散っている二人、一色即発な感じです。
そしてお昼休み、１組と６組以外は競技が終了してます♪一人のゲスによって♪

「さて・・・午後は全力で行くぞ！お前等！覚悟しろよ！」

「おう！」

こうして昼休みも終わり、ついに１組対６組！球技大会最終決戦です！
それでは１組のオーダー紹介しま～す♪

１番　セカンド　土村影太
２番　キャッチャー　赤神桧人
３番　サード　三河歩
４番　ショート　荒神麗花
５番　ピッチャー　望月鋳鶴
６番　ライト　福原修
７番　センター　青木直人
８番　ファースト　仲谷昇平
９番　レフト　白鳥要

「わっ私も参加するんですか！？教師が参加しても良いのでしょうか・・・」

「白鳥先生、別に教師が参加しちゃダメとか書いてねぇだろ？それに先生にも作戦に参加してもらいたいしな。」

「はっ・・・はぁ、まぁ分かりました！私も頑張ります♪」

少し困る先生、可愛いです！あと三歳ぐらい若ければもっと可愛いですよ！はい！

「さて！プレイボールだ！」

「桧人～負けないわよ！」

そして初回、６組の先攻、ピッチャー望月！投げました！

キィィィィィィィィィィン！

ホ～ムラ～ン♪って！どうしたんですか望月君！？ホームラン打たれちゃいましたよ！？

「桧人！どういう事だよ！ホームランだよ！？ちゃんとサインしろよバカ！」

「そっちこそ！ちゃんとコントロールしやがれ！このどアホがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

あらあら息が合ってなくて喧嘩が始まっちゃいましたね～

「ったく！こんな事で喧嘩してる場合か！ほら！元野球少年さっさと抑えるぞ！」

さすが赤神君、鋳鶴君をなだめています。
そして次のバッター、次はど真ん中のカーブの指示、鋳鶴君！振りかぶってなげました！

カキィィィィィィィィィィィィィィィン！

「バットを寄越せぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！こいつを殴ってから試合再開だ！」

「それはこっちの台詞だぁ！この能無しキャッチャーがぁぁぁぁぁぁ！」

またホームランそして喧嘩、この二人は・・・バカの塊ですねぇ～・・・

「能無しキャッチャー・・・次から本気で投げるよ？いい？」

「あったりめぇだろ！ばっちこいや！」

バンバンとミットを叩く赤神君、鋳鶴君も顔が本気になります。
そして場が緊張に包まれ、そして・・・鋳鶴君の表情が変わりました。
さぁ！ここからが反撃です！
以上、空の声でした～♪

第６話：魔王と球技大会（後書き）

第６話如何だったでしょうか？感想いただけたら発狂します！７話はきちんとした試合をお送りしますのでよろしくお願いします！

第7話：魔王と反撃開始！（前書き）

とってもゲスな作戦が成功したはいいが初回からいきなり2失点の大ピンチそこでついに、魔王兼主人公、望月鋳鶴＜もちづきいずる＞の本領発揮！？

第7話：魔王と反撃開始！

「鋳鶴＜いづる＞俺たちは勝つ！めいっぱいこい！俺が全部捕ってやる！バックもやる気を出してくれている！頑張れよ、元陽明学園小等部野球部のエースさんよ。さぁ！お前等ぁ！しまっていくぞおらぁ！」

やる気満々の赤神＜あかがみ＞君、その闘志が1組ナインにも伝わります。

鋳鶴君は自分の胸をトントンと叩きます。

「抑える・・・抑える・・・！」

「なんなのかしら・・・望月君さっきと雰囲気がまったく違う」

思わずびびってしまう赤神君の彼女、鈴村＜すずむら＞さん、そりゃそうです。今、鋳鶴君はとてつもなくオーラ的なものを出しているのですから。

そんな鋳鶴君の第1球目、ズバンッ！と音をたてるミット、赤神君が目を見開いて驚いています。

「いっ！今の何？！？速すぎるんだけど！」

慌てる鈴村さんそんな鈴村さんが気にしている球速、みんながおずおずとバックスクリーンを見る中、

１４２？と表示されていました。学校にバックスクリーンって・・・

この学校金持ち過ぎですよね～・・・学園長の顔が見てみたい。

「私だって負ける訳にはいかないのよ！」

燃え上がる鈴村さん、スポコン小説じゃないんですけどね～・・・

そして・・・

第２球目！横に歪むように曲がるスライダー、かんなの女の子が打てるはずもなく・・・

鈴村さんはあっけなく三振、悔しがる鈴村さんだからスポコンじゃありませんから！

そしてついに初めて！いややっと！１組の攻撃！一番土村＜つちむら＞君！

「エロフェッショナル！頼んだぞ！」

「エロは余計・・・」

相変わらずの返答、そして鈴村さんの第１球、土村君バントの構え！

「えっ？いきなり！？」

バットに当たりボテボテと転がる球、鈴裏さんが急いで投げるもさすが我らがエロブリティッシュです！そして２番赤神君、もちろんホームラン狙いしかしその鈴村さんの赤神君に対する第１球、

「盗塁だー！キャッチャー！」

土村君の盗塁を阻止しようとしたキャッチャー、しかしそこにはボールは無く、バックフェンスをボールが直撃していました。そして土村君がホームイン、赤神君は二塁で止まりました。

６組ー１組

２　１

「しゃぁ！見たか詠歌＜えいか＞！お前のなまくら球なんか屁でもねぇぜ！」

余裕こきまくりの赤神君、すると・・・？

「誰の球がなまくらだって・・・？桧人＜かいと＞・・・人をバカにするのもいい加減にしなさい・・・」

暗黒のオーラ的なものをまき散らす鈴村さん、なんかもうヤンデレ末期の様な風貌です。

そして３番バッター三河＜みかわ＞さん、リードする赤神君、その時！ビュン！と音をたててボールがサード方向に、

「まっ・・・まじかよ！？」

牽制でまさかまさかの赤神君がアウト、相変わらずヤンデレ顔の鈴村さん！怖いです！怖すぎます！

構える三河さん、そして第１球、ビュン！と音がたちます。一応三河さんも女の子打てるはずがありません。そしてバックースクリーンを見る１組・６組の皆さんバックスクリーンには

１５５？

という数字が表記されていました。中学生で投げられる球ではありません、もちろん打つ事も難しいです。ヤンデレ状態って恐ろしいですよね～・・・

そして４番荒神＜あらがみ＞さん、そんな不良少女でも打てる筈もなく三振に終わってしまいました。

そしてここからは両チームエース？の投げ合いです。
両チーム８回まで何も起こらず鋳鶴君と鈴村さんが三振ショーという試合展開になり現在二人の成績はというと、

望月鋳鶴　　鈴村詠歌
三振１５個　　三振２３個
被安打４本　　被安打２本

四死球０　　四死球０
失点２　　失点１
自責点２　　自責点１
投球数９８　　投球数１０４球

そしてついに９回表最後の６組の攻撃はというと圧巻の鋳鶴君が三者連続三振にとり９回裏になりました。まだヤンデレ状態の鈴村さん、そして先頭バッターは赤神君、そこで土村君があるボタンを押しました。すると・・・？

「詠歌！許してくれ！俺はこんな卑怯な真似はしたくなかったんだ！俺はどうしても優勝しなければならない！詠歌、頼む！勝たせてくれ！優勝したら・・・俺はお前を嫁にするつもりだ！」

「は・・・・？」

一番驚いてるのは赤神君そりゃそうですよ。自分がアホな事言ってるんですから、
それを一番聞いていたのは・・・・

「そうだったの・・・？桧人、ホントぅ？」

上目使い＋ものすごい至近距離で赤神君を見つめる鈴村さん、それはまるで子犬のような瞳です。

「うっ・・・ちがっ・・・・」

ゴゴゴゴゴ・・・というオーラの出来そうな鈴村さんを見て赤神君はというと？

「そうだ分かったたか？なら早くベンチに戻れ後で迎えに行くから（棒読み）」

「うん♪待ってるね♪」

うわぁ・・・この男最低ですね！最低すぎます！騙される鈴村さんもそうですがこの男最低です！
そして６組はスローボールしか投げれられない小が登板その第１球！

「ちくしょぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！」

ギィィン！と音の鳴ったバットから放たれた特大ホームラン、まぁ今までの悪行の報いですね。
涙を流しながらダイアモンドを走る赤神君♪そんなに結婚が嬉しかったんですかね〜♪
そして土村君が塁に出て、ヒロイン？二人は三振、いいところを跳ばされた主人公が最後にホームランという事はなく、荒神さんがホームランを打ってしまいサヨナラ勝ちを収め見事１組は優勝しました〜♪
一人を除く１組メンバーは歓喜に沸きました・・・

しかし鋳鶴君はその後、何が起こるかも知らず
仲間達と喜びを分かち合うのでした・・・・

第7話：魔王と反撃開始！（後書き）

さぁ！球技大会！見事にグダグダですが完結しました！だい8話は現在考え中です～これからもガンバっていきますので！応援していただければいいかなと思います

第8話：魔王と謎の魔王科生徒（前書き）

祝！１組球技大会優勝！打ち上げなども終わり魔王兼主人公、望月鋳鶴君＜もちづきいづる＞は、クラスメイトで幼なじみも三河歩＜みかわあゆみ＞さんと仲良く帰る所です。しかし二人が家まで着きかけた時、事件は起こったのです。

第８話：魔王と謎の魔王科生徒

「今日は疲れたな、ほら」

自動販売機で飲み物を二本買い鋳鶴君に一本ジュースを投げ渡す三河さん

「あっありがと、珍しいね歩が飲み物奢ってくれるなんて・・・」

「私がお前に物を奢ってはいけないのか！？」

波瀾万丈の球技大会が終わり二人で帰る三河さんと鋳鶴君、そんなことよりも！

鋳鶴君！素直に受け取りましょうよ！相変わらず羨ましい。

「今日はお前のおかげで勝てたようなものだ。よっ・・・よくやったな・・・」

「歩、ありがとう♪また明日は学校かいや～やっと褒められて嬉しいよ♪」

「そっ！そうか！わっ！私に褒められて嬉しいか！」

あまりの恥ずかしさに顔が真っ赤になる三河さん青春ですね～♪

もう家の近くまで来てしまいました。しかしまだ真っ赤なお顔の三河さん家まで後５ｍ

という所で鋳鶴君が何かに気がつきました白いマントを羽織った人が望月家前に立っていました。

「えぇっと・・・家になにか用かな・・・？良かったら家に入れるけど・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・結様に会いに来た・・・・・・・・・・・・」

「結姉？今学校でさまた明日か帰ってくるまでまっ・・・・・・！」

鋳鶴君の腹にいきなり鋭い蹴りが食い込む、そしてその白マントが重い口を開いた

「その方の名を気安く呼ぶな・・・・弟というだけの存在で・・・・」

「歩・・・！家に入れ！早く！」

「鋳鶴！」

「早く！入れ！」

怖々と家に入る三河さん怯えきった目をしています。鋳鶴君は臨戦体勢です。

「お前の存在が我らが将軍に迷惑をかける・・・お前には死んでもらわなくてわな・・・お前が将軍の邪魔になり・・・陽明を滅ぼすきっかけとなる前に・・・」

「じゃあ・・・君は結＜むすび＞姉のなんなんだ・・・」

「私はあの人の側近であり部下だ・・・」

「君だってその程度じゃないか！それで結姉を俺から離そうとするんだ！」

「お前は将軍様にとって邪魔な上、迷惑だ他人にもお前の周りの人間も・・・今までに無かったか？お前のせいで死んだり、傷ついたりした人間が・・・」

「黙れ・・・」

「そしてお前が殺したようなものだ。なぁ？魔王」

「僕は魔王じゃない・・・その口を塞ぎやがれ・・・」

声が冷たく小さくなる。

「お前は魔王さ、左胸を見てみろ・・・刻印があるではないかそれとも無いとしらを切るのか？
それとも自分を魔王と認めるのか？」

「その口を塞ぎやがれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」

叫び声を上げ殴りかかる。しかし白マントはそれを何も無かったかの様にヒラリとかわす。

「なぜ怒る？事実ではないか！お前が周りを苦しめ！悩ませ！終いには殺していく！
それが魔王だ！それがお前だ望月鋳鶴！」

「僕は魔王なんかじゃない！僕はただの人間だ！望月鋳鶴だぁ！」

「その考えが周りを終いへと導く！お前が消えゆけば周りは幸福になるのだ！」

ドゴッ！っと望月鋳鶴の鳩尾に強くしなやかな右腕が入る。蹲る鋳鶴君を尻目に白マントは言う

「自分を魔王と認めたくない・・・なんという傲慢そして弱さ、自覚の無さ・・・さぁ・・・これでお前は死ねる大丈夫だ家族には留学にでも行ったとでも言っておく・・・」

大きな剣を懐から抜き出す。その時・・・

「なぜだ・・・なぜ立つ！魔王とはいえ覚醒無しに！普通化の人間では普通耐えられれん程の打撃を打ち込んだ筈だ！そなのになぜ！」

倒した筈の男がそこに・・・確実に倒した感触があった。それなのに男は立っている。

その上半身には左胸にある筈の刻印を漂わせて

「俺は・・・魔王じゃない・・・」

「認めろ！それが刻印だ！お前は魔王だ！」

その時、右手から黒い閃光が白いマントへと飛び襲う、

「暗黒魔法だと・・・・！？魔法科ではないはず！」

この男はおかしいそう思い恐怖したその時、男は倒れた。

そこには彼の姉の結が居た。

「命令違反とは・・・随分とでかくなったな」

「将軍！もっ申し訳ございませんっ・・・！」

「謝る位ならはじめからこの様な事をするな・・・分かったか・・・もう今日は寮に帰れ」

「かしこまりました・・・申し訳ございません・・・」

トボトボと帰っていく白マント、鋳鶴君を抱き抱え、結さんは家に入りました。

「右手をかなり酷く打撲してるね～・・・愛弟をこれ程傷つけるとは～・・・」

鋳鶴君の手当をしている望月家の三女・穂詰＜ほつみ＞さんとても弟思いのいいお姉さんです。
一番そわそわしているのは次女の安奈＜あんな＞さんそわそわしすぎです。

「うっ・・・いてて・・・うっ・・・家か・・・」

「おぉ！鋳鶴！起きたか・・・良かった・・・」

「僕は・・・あっ！夕飯の支度しなきゃ！」

「お兄ちゃん神奈＜かんな＞がやっておいたよ♪」

鋳鶴君の代わりに夕飯を作ってくれたのは八女の神奈ちゃんです。
そして今洗濯場から誰かがでてきました。

「おっ・・・・！お兄ちゃん！ゆりっ！ゆりが洗濯したいたよっ！ぜぇぜぇ・・・・」

猛烈な速さで洗濯を終了させて息がだだ漏れの子は七女のゆりさんです。

「おい・・・大丈夫かよ・・・虐められたか・・・？」

顔に似合わず長女の恐子さん、意外と心配性なんですよ？ほんっと人は見かけによりませんねぇ～・・・

こんな優しい姉妹方に囲まれてうらやまし・・・じゃなかった！幸せそうですね～ほんっと羨ましい・・・

しかしあの白マントそして魔王科の謎・・・いったいなんなのでしょうか・・・

以上空の声でした～♪

第８話：魔王と謎の魔王科生徒（後書き）

今回第８話！いかがだったでしょうか！少しシリアルさというかバトルを加えてみました！感想など頂けたらうれしいです！９話はいつになるだろう～・・・

第9話：魔王悩むそして・・・（前書き）

昨日の魔王科の白マントの闘いで傷を負った鋳鶴<いづる>君、それでも学校に行きます。しかし彼の悩みは尽きません。

第9話：魔王悩むそして・・・

「僕は魔王なんかじゃない・・・僕は・・・」

昨日の事が忘れられないのでしょうか、鋳鶴君は悩んでいます。
自分の情けなさに苛立ち始める鋳鶴君、なんといえない負の感情が抑えられません・・・

「なぜ怒る？事実ではないか！お前が周りを苦しめ！悩ませ！終いには殺していく！
それが魔王だ！それがお前だ望月鋳鶴！」

記憶が鮮明に醜く蘇る

「僕は・・・居ない方がいいのかな・・・僕が居るとみんなが死んでしまう・・・くっ・・・うっ・・・」

あまりの悲しさに泣いてしまう・・・ただ自分の非力・情けなさではない。ただ自分が魔王というだけ・・・それだけで嗚咽、涙、感情が溢れ出してくる。

「自分を魔王じゃないって言えばいいのよ♪そうすればあの人達も言わなくなるって♪」

望月家三女の穂詰＜ほつみ＞さんが鋳鶴君にフォローを入れます。
そのフォローに鋳鶴君は、

「うるさいよ・・・穂詰姉に何が分かるんだよ！僕に関わらないで

くれよ！この飲んだくれ！」

あらら・・・鋳鶴君、そういうことは言っちゃ駄目でしょう・・・

すると・・・穂詰さんはギュッと鋳鶴君を抱きしめ・・・

「私達は家族でしょ・・・とくに鋳鶴は長男なんだから！こんな事で泣いたりしてどうする！娘に死ねって言われて泣く私たちの父さんより酷いわよ！？」

これも姉の愛情というやつなんですかね・・・望月父はどんな人なのでしょうか・・・少なくともガラスのハートですね。

「でも・・・僕が居たら・・・みんな死ぬかもしれない・・・」

「死なないわよ♪死ぬわけないじゃない！私たちの母さんを思い出してみなさい！」

表情が変わる鋳鶴君、コクコクと頷きました。

「死ぬわけないよ・・・ね♪」

「はい！そうと決まったら朝ご飯作りなさい！みんなお腹すいてんだから！」

「そうだね♪よし！朝ご飯つくるか！」

やる気の入る鋳鶴君、微笑ましいです♪

彼の朝は大変です。それでも彼は今の生活が大好きです。彼が彼らしく生き暮らしていけるのですから、

そして朝の準備みんなの出迎えも終わり鋳鶴君も学校に行きます。

「鋳鶴～！おせぇぞ～」

「遅い・・・！写真5枚も撮れた・・・」

「鋳鶴・・・すまなかった・・・私は・・・」

「いいんだよ♪気にしないで、歩がした事は正解だよだから、ね♪気にしないで。」

「何かあったのか～ｗｗお二人さんｗｗ」

「怪しい・・・」

「なっ！何もないから！うん！早く行こう！遅刻しかけるよ！？」

「そうだな♪行くか！」

今日も元気で四人が学校に走って行きます。まさに青春って感じですね～♪こうして魔王兼主人公の望月鋳鶴の一日がスタートするのです。

そのころ・・・陽明の普通科のある部屋では・・・

「魔王が普通科に居る？冗談でしょ？」

眼鏡をかけた男が口を開く

「会長、冗談ではありません、これをご覧下さい。」

冷静沈着に秘書らしき女性が答える

そこには、昨日の家の前での鋳鶴君の姿が・・・

「いやいやいや！ＣＧでしょ！ＣＧだよ！絶対ＣＧ！」

「何回言うんですか・・・困った人ですね・・・」

「普通科に魔王か～・・・困ったな～・・・」

「どうしますか？」

「相談は無し！うん！魔王が普通科に居てもいいじゃないか！それに僕も普通じゃないしね！」

「自信満々に言われても・・・」

「でも一度会ってみたいなぁ・・・僕は圧倒的普通者だからね♪彼に敬遠はされないでしょ♪」

「はぁ・・・この駄眼鏡は・・・」

第9話：魔王悩むそして・・・（後書き）

第9話いかがだったでしょうか！そろそろ番外編などなど作っていきたいと思っています！感想等々お待ちしております！

第１０話：魔王と陽明学園普通科生徒会長（前書き）

ついに！主人公兼魔王の望月鋳鶴＜もちづきいづる＞君の通う陽明学園普通科のボス！いえ生徒会長が鋳鶴君に会いに来ました・・・はてさてなにが起こる事やら・・・

第１０話：魔王と陽明学園普通科生徒会長

ー普通科生徒会室ー

「嫌だ！嫌だったら！僕は会いに行かないよ！？絶対行かないしめんどくさい！会長命令で他の生徒に接触させてよ！」

椅子に居座ったまま離れない人が居ます。あの駄々こねながら暴れているのは我らが、陽明学園普通科
生徒会長　風間一平＜かざまかずひら＞君です。女ったらし眼鏡！オタク兼生徒会長と駄目駄目で残念な人です。

「あなたは会長でしょうが！少しは側近である私の身にもなって下さいよ！誰が学園長にあなたの駄目っぷりを教えてあげてるんです！？学園長もガッカリされていましたよ！昔は良い子だったって」

「雛罌粟＜ひなげし＞！僕はね！？駄目を演出してるんだよ～♪普通に駄目な人間おぼふぉぉぉぉぉぉ！！！！」

跳んでいく駄目会長それを蹴り飛ばし椅子から降ろしたこの方は、雛罌粟涼子＜ひなげしりょうこ＞さん、眼鏡っ娘で普段はクールで売っています。駄眼鏡の側近で毎日苦労しているそうです。

「行ってくださいね・・・普通の事ですよ・・・？普通の！！！！」

「分かった！行く！行くよ！行けば良いんでしょ！・・・・・・そんなに怒るから小じわとか出来かけてるんだよぉい！」

「何ですか♪誰のせいでそういう事気にしているか分かってますか

♪」

もう一辺言ってみろやオーラの出てる雛罌粟さん恐ろしく怖いです。そして昼放課普通科の皆さんの大移動が始まりました。

「会長、望月君が1人になった所をかっさらってください。」

「はいはい・・・えぇ～っと・・・へぇ～あれが魔王か～・・・・っ！？彼女と飯か！？リア充爆発しろ！」

なんという負け犬台詞でしょうか色んな意味で哀れです。鋳鶴君は三河＜みかわ＞さんと相変わらずリア充しています♪うらやましったらありゃしない・・・

「いっ！鋳鶴！きっ！今日はべっ！弁当を作ってきてやったぞ！？感謝するがいい！」

照れ隠しが旨くいってない三河さん、完璧に浮いちゃってます。

「ありがとね歩♪今日はお弁当自分のだけ作るの忘れちゃってさ～・・・助かるよ～・・・」

やった～！という感じの鋳鶴君幸せそうな顔をしています。よっぽどお腹が空いていたのでしょう、もう食べ始めちゃってます。

「いっ！鋳鶴！口をあっ！開けろ！あっ～あーん・・・あれ・・・？」

一瞬で自分の視界から鋳鶴君とお箸で持っていた卵焼きが消えてしまった事に動揺を隠せない三河さん、1人寂しくお弁当を口にしま

す。
そんな消えた卵焼きと鋳鶴君の行方は・・・・・・・・駄眼鏡の隣に居ました。
「君が鋳鶴君？中等部の生徒にしては大きいね～１７７ｃｍぐらいかな？」
まじまじと鋳鶴君の観察をしだす風間さんちょっとキモイです。あ、言っちゃった。
「あなたは・・・？バッチで見たら普通科の方ですけど・・・」
おどおどする鋳鶴君さすがの鋳鶴君も動揺を隠せない様子。
「よくぞ聞いてくれた！僕はこの陽明学園普通科高等部生徒会長！風間一平であーる！」
決まった・・・という感じの駄眼鏡さん、鋳鶴君の口がポカーンと開いています。
「えぇっと・・・まず僕が質問するから答えてね？嫌なのがあったら答えなくてもいいから」
「えっ？あっはい」
「1、君は魔王ですか？」
「魔王じゃないですし魔王になる気なんかさらさらありません」
「2、体育大会には出たい？」

「出たいです！是非とも！普通科に貢献したいです！」

「最後！３！あの女の子は彼女！？」

「あれはただの幼なじみです！なんでですか！？」

あたふたする鋳鶴君若干顔が赤くなってます。

「うん♪それだけこの３つが聞きたかった。今日はこれでおいとまするよ♪まったね～」

帰っていく駄眼鏡さん、ポカーンとする鋳鶴君、なぜですかって？普通科の人間、会長といっても空に浮くのですから、そして

ー生徒会室ー

「ですからそういう事と・・・まだ魔王でないという事は、覚醒無し一般人という事ですね？はい分かりました了解です。」

駄眼鏡からの通信と切る雛罌粟さんまだやる事は残っています。今日も大変です。

・・

「まだ、まだ魔王でないという事はあっている・・・体育大会で何か起こるかもしれませんね・・・」

繭をしかめる雛罌粟さん、そんなに睨むと小じわが小じわがぁぁぁぁぁぁぁぁ！

そんな事はさておき、怒った三河さんをなんとか授業中にでも上機嫌にさせようとする鋳鶴君・・・

見苦しいですね～・・・

そして放課後、陽明学園のどこかで会議が開かれました。

第１０話：魔王と陽明学園普通科生徒会長（後書き）

第１０話いかがだったでしょうか！次回は各科の会長さんが出る！かもしれません！ではまた次回で～感想など頂けたら・・・

発狂します！

第１１話：居残りさせられた魔王と陽明学園密会・・・？（前書き）

授業も終わり帰るぞ～ムードだった我らが主人公、望月鋳鶴＜もちづきいづる＞君しかし、クラスの担任の白鳥＜しらとり＞先生に教室に残されてしまいます。
その頃、陽明学園某所では、各科の会長達の密会が行われようとしていました。

第１１話：居残りさせられた魔王と陽明学園密会・・・？

チャイムが鳴り今日の学校の授業が全て終わりました。もう帰るぞ～ムードの皆さん、赤神＜あかがみ＞君が鋳鶴君と土村＜つちむら＞君を一緒に帰ろうと誘おうと声をかけます。

「鋳鶴～影太～帰るぞ～？」

「・・・今日は荒神＜あらがみ＞に誘われてしまった・・・死ぬかもしれない・・・」

「ごめん桧人＜かいと＞！先生に教室に残れって言われちゃってさ～・・・ごめん！」

「二人とも無理か、一人で帰るとするか」

二人の用事などを聞きその場を立ち去ろうとする赤神君、その時！６組から猛スピード走ってくる何かを目にしました。するとその何かは赤神君の前に止まり言葉を発しました。

「桧人～♪一緒に帰ろ♪」

そこに居たのは６組の赤神君の彼女さんの鈴村＜すずむら＞さんが居ました。

「何でお前と帰らなきゃいけねぇんだよ！お前等！？違う！これはだな！？」

焦る赤神君一部始終を皆さんに見られてしまいました。

「赤神ぃ～・・・てめぇ～・・・リア充しやがってぇ～・・・」
1組の非リア充男軍団＋鋳鶴君と土村君が赤神君を殺気で満ちた目だ見ています。すると詠歌さんはそんな皆さんの前で・・・
「桧人・・・ぎゅうってして・・・」
爆弾を投下しました。確実に核弾頭の域を超えた爆弾が落下しました。それを見て刃物やらカッターやらほうきなどを構える非リア充諸君、
「詠歌＜えいか＞！俺から離れろ！頼む！離れてくれ！離れてくださいっ！」
「桧人お願い・・・あの日の続き・・・して・・・」
まるで子犬の様な甘えた声を出す鈴村さん、この現場を見て黙ってる1組の男は誰もいません。
「赤神を殺せぇぇぇぇぇぇっ！骨、いや！細胞も残すな！とにかく殺す事だけを考えろ！」
「ちぃぃぃぃっ！どいつもこいつも！俺は無実だ！何もしてない！」
猛反論する赤神君、そこに鈴村さん横槍が飛んできました。
「桧人が・・・したいって言ったから・・・」

猛ダッシュ！1人のリア充が今猛ダッシュしました。

「お前等ぁっ！あの野郎を許すなぁぁぁぁ！全軍突撃ぃ！」

「桧人はやっぱ面白いや♪望月君、居残りガンバってね～♪」

ニコッと笑う鈴村さん、嘘だったみたいです。
鈴村さんが桧人君を追い走り去っていきました。そうして今、教室には鋳鶴君と土村君しか居なくなってしまいました。

「影太～？帰るぞ～？望月は居残りか？ご苦労なこった・・・まぁがんばれ！行くぞ影太！」

スケバン少女の荒神さん、掃除のおさぼりから帰って来ました。影太くんは鞄を持って、

「・・・鋳鶴・・・頑張れ・・・！」

と、友達らしい事を言ってくれました。
なにかと心配してくれている二人のそんな優しさに鋳鶴君もこれからどんな居残りが待っていようとも乗り越えていけそう！という雰囲気です。
すると、担任の白鳥先生が入ってきました。相変わらずの白衣です！ナースっぽいです！一応理科の先生ですからね！

「望月君・・・先生はほんとの事を言ってほしいんだけれど・・・言いたくなかったら答えなくていいからね・・・？」

重苦しく会話をはじめる白鳥先生、鋳鶴君の心の中に緊張が生まれます。

「何ですか・・・？基本的に答えられる事は答えますけど・・・」

「あのね・・・先生は望月君の事を大好きよ？もっ！勿論先生としてね！？球技大会も真面目にやってくれたし、掃除やゴミ捨てとかもキチンとしてるし・・・でもね・・・魔王科の子と喧嘩とかしてない・・・・？」

おずおずと聞く先生、しかし鋳鶴君はキッパリと・・・

「あっ・・・えぇっと・・・あれは喧嘩ですかね・・・？はは・・・」

言えませんでした。

「でも喧嘩なんかしていません！これは本当です！」

キッパリと言う鋳鶴君、その答に先生は涙ぐみながら・・・

「よかったぁ・・・先生心配してたの・・・そういう噂をきいたから・・・よかったぁ・・・」

ブハァ！先生！上着はだけてる！言わなきゃ！言わなきゃ！

思春期ですね～・・・先生はまだ２２歳なのでピチピチなボディーが目の前にあります。鋳鶴君はＫＯ寸前です。

「先生まだお仕事あるからじゃあまた明日、さようなら♪」

「はぁ～やっと帰れる～・・・」

ため息をつく鋳鶴君！彼の一日はまだ長いのです！

ーーーーーーーー陽明学園某所ーーーーーーーー

「さて・・・そろそろはじめる？」

「風間＜かざま＞が来てないようだが？」

風間さんは前にでた普通科の駄眼鏡会長です。

「では私が変わりにやろう・・・出席をとるぞ・・・機械科、金城沙耶＜かねしろさや＞」

「はいであります！」

「魔法科、虹野瀬縒佳＜にじのせよりか＞」

「ここに居るじゃない・・・」

「銃器科、月野蛍＜つきのほたる＞」

「なんだい？」

「科学科、朝倉藍子＜あさくらあいこ＞」

「はぁ～い♪」

「やっときたか・・・普通科、風間一平＜かざまかずひら＞」

「いや～♪遅れてすいません～♪」

「そして私、魔王科、望月結だ。それでは会議を始める」

ついに始まる会議しかしこの駄眼鏡・・・完璧に場違いです。こうして長いようで短い会議が始まったのです。

第１１話：居残りさせられた魔王と陽明学園密会・・・？（後書き）

今回は会長集合会にしました次回は、会長達の会議の内容になると思います。。多分・・・・

第１２話：魔王と体育大会会長陣会議（前書き）

やっと居残りが終わり家に帰れる我らが主人公、望月鋳鶴君、しかしその時陽明学園某所では体育大会の会議が行われ、そして・・・望月家についにあの人が！？

第１２話：魔王と体育大会会長陣会議

「はぁ～・・・やっと終わった・・・先生に心配かけるんじゃなかった・・・ふぅ～・・・」
やっと帰れるムードが出ている鋳鶴君、よほど疲れたんでしょう、普通の男の子なら、まぁねぇ？
そして家に向かう準備をして学校をあとにしました。

ーーーーーー陽明学園某所ーーーーーー

「で？会議とは何をするでありますか？我が輩には機械の整備と新兵器の開発があるのでありますが？」
眼鏡ロリの機械科会長、金城＜かねしろ＞さんがそう言い放つすると、文句を言う人がもう1人。

「私も・・・研究があるのですけど・・・早急に終わってくださると・・・嬉しいです」
白衣お嬢様の科学科会長の朝倉さんもめんどくさいと言わんばかりの態度です。

「まぁ、体育大会の話だ。とにかく早めに終わるつもりだ」
魔王科代表の鋳鶴君のお姉さんの結＜むすび＞が周りをなだめます。
するとあの駄眼鏡が・・・

「虹野瀬＜にじのせ＞ちんは彼氏とか居るの～？」

「あなたに答える義務が私にある？あなたみたいな間抜け野良に教える義務なんてこの世に存在しないわ、私にもやらなきゃいけない事が沢山あるのよ。山の様にね」

駄眼鏡を罵倒しつつ自分も帰りたい事を示す魔法科会長の虹野瀬さん、いや様でしょうか？

こんな駄目・・・じゃなかった！こんな素敵な会長達の上に立つ学園長はさぞ素晴らしいんでしょう！

多分いえ！きっとです！はい！

「とにかく・・・今年の体育大会は、各科対抗戦争にしよう」

「戦争・・・？」

各科の代表が魔王科代表に尋ねる。

「あぁ、死なないがダメージや痛みは感じる、リアルでいいだろう、それにルールも今作った」

ーーーーー各科対抗戦争ルールーーーーー

・魔王科は４人、機械科は６人、普通科は９人、魔法科・銃器科・科学科は５人までが参加人数とする。

・トーナメント戦となり二科ずつ闘い勝った方が二回戦に進み、二回戦が終わると決勝戦となる。ちなみに一回戦が終わった時点で人数の少ない科が優先的に決勝シードとなる

・敗北条件は全滅または敵大将を撃破されるかのみである

・大将は各科の会長がやる事

・核兵器、衛星兵器、禁忌魔法、超弩級帆船または戦艦の使用、毒物、殺傷能力のある薬などの使用を禁止する。

・対抗戦争は各科の教室、食堂など全ての場所で放映される

・戦闘場所は旧校舎のみ、旧校舎がなんらかの不祥事で破壊された場合大規模下層グラウンドを使うこと

「以上だ。異論はないな？よし！では解散！」

各自散り散りになる会長達各科はこの学校競技を本当に楽しみにしています。普通科の方々以外はですが・・・

ーーーー望月鋳鶴ーーーー

「もうすぐ家だ・・・なんか嫌な予感がするな・・・」

そんな事を呟く鋳鶴君、手帳の電話機能何気なく起動させましたすると・・・

「お兄ちゃん今どこ～？」

「今？もうすぐ家だよ？」

電話をかけてきたのは望月家7女のゆりさんでした。

「お母さんが帰ってきたよ～♪早く帰ってこいだって～」

「そっ！そうか！わかった！もうすぐ帰るって！つっ！伝えといて！」

「は～い」

そうして電源を切る鋳鶴君、冷や汗が止まりません、まるでこの世のは終わるのか！っていう顔してます。

「嘘だろ・・・・？あの人が・・・・？」

ブルブル震える鋳鶴君、なんか大変な事が起きそうな予感です。

第１２話：魔王と体育大会会長陣会議（後書き）

第１２話如何だったでしょうか！最近お気に入り登録してくれたかた。ありがとうございます！前から登録していただいてる方！いつもありがとうございます！

ご感想、励ましの言葉等々頂けたらうれしいです！

第１３話：魔王と人類史上おおよそ最強で最恐の母親（前書き）

ついに・・・望月<もちづき>家の母親が帰ってくる・・・我らが主人公鋳鶴<いづる>君は冷や汗が止まりません、しかしその母親様は本心はいい人なのです。そして・・・鋳鶴君は、選択するのです・・・

第１３話：魔王と人類史上おおよそ最強で最恐の母親

母親が帰ってくる・・・鋳鶴君の冷や汗が色んな意味でヒートアップしています。なぜなら、鋳鶴君の母親は世界最強いや、世界最恐のお母さんなのです。
しかし医者です。
しかも世界一のお医者さんなのです。
そんなハイパー超凄いお母さんなのですが、鋳鶴君にとってはただの最恐のお母さんです。と鋳鶴君が思っています！本当ですよ？

「はぁ・・・どうしてこんな時期に・・・いつもならお盆すら帰ってこないのに・・・」

とぼとぼと・・・まるでリストラされたサラリーマンの様な雰囲気を醸＜かも＞し出す鋳鶴君、中学三年生に見えませんそんなとぼとぼ歩いてても家には着いてしまいます。

「あぁ・・・帰ってきちゃった・・・うぅん・・・入ろうかなぁ・・・」

うじうじしている鋳鶴君、さっさと入れ！とか言いたいのですが、私は天の声なので♪

「ふぅ～・・・望月鋳鶴・・・！僕は男なんだ！よし！行くぞ！ぶべはっ！」

その時扉がブチ破られました。そこにはとてもキレイな御美足がそして視線を上に動かすと、

「何してんだ・・・？私が帰って来たのに飯すらねぇとは・・・いい度胸してんなぁ・・・鋳鶴・・・ただいま」

そこには鋳鶴君の母親の

「間違ってる！前の言葉と後ろの言葉の順番が間違ってる！あっ、おかえり・・・」

鋳鶴君も前の言葉と後ろの言葉の順番を間違えています。

「あっ扉壊れた、治しといてくれ私は風呂入ってくるからあと飯と洗濯なぁ～」

「は～い・・・しっかし8ヶ月ぶりなのにこの仕打ち・・・疲れるなぁ・・・」

「鋳鶴～♪お酒頂戴～♪」

「キッチンの下にあるから！あと飲み過ぎないでね！神奈ー！夕飯お願い！ゆりー！洗濯ー！」

「了解しました！神奈ー！行くぞー！」

「はいはい♪お兄ちゃんケガしないでね～！」

「あぁ・・・あんな優しい妹達が居て僕は幸せだな～・・・」

幸せ～とでもい思っていそうな鋳鶴君、いっつもご苦労様です。お酒を飲み漁る三女、穂詰＜ほつみ＞さん、駄目兄貴の為に頑張って代わりに洗濯している七女のゆりさん、またまた駄目兄貴の為に

頑張って料理をしているのは八女の神奈さん、ちなみに他のお姉さん達
は帰ってきていません。

「扉が無い・・・鋳鶴！何があった！」

「扉・・・？そんなもんあったか・・・？」

「母さんが壊したの！恐子姉はいつも壊してるだけ！扉はあるから！僕が治してるから！」

ただいま帰って来たのは長女の恐子さんと次女の安奈さんです。相変わらずこの人達も変わってませんねぇ・・・

「もうすぐご飯できると思うから・・・早く中に入って～・・・」

「飯・・・！」

「そうか、怪我するなよ～」

いそいそと歩いていくお二人、もう6時半・・・六女の結さんと四女の真宵さんが帰ってきません・・・いつも帰ってこない真宵さんはいいのですが、いつも剣道着で帰ってくる結さんが帰ってこないと鋳鶴君は心配です。

「結なら陽明の女子寮で泊まるそうだ～後、梓はアメリカに帰った～」

「ならよかった・・・安奈姉ありがとう♪」

ニコッと笑う鋳鶴君殺人級の笑顔です。
ついつい赤くなってしまう安奈さん鋳鶴君の笑顔は姉をも虜にするそうです。
そして扉を直しやっと席に着いた鋳鶴君、みんなで手を合わせ頂きますをしてみんなでがっつきます。
これが普通の家族の普通の日常なのです。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
やっと・・・やっと食事が終わりもうみんな寝てしまったのですがまさかのお母様のおかわりコール無限の胃袋ですしかも夜の2時までおかわりですよ！？信じられませんね・・・
「腹一杯だ～・・・鋳鶴、私はお前を珍しく褒めようと思う。頑張ったな～」
「あっありがとう・・・あのさ・・・母さん・・・今日はどうして帰ってきたの・・・？」
「帰って来たら悪いか？」
「僕に嘘は通用しないよ・・・母さんの嘘つく時は顔がしかめっ面になるからね・・・」
鋳鶴君！あんた何者ですか！もうさすがとしか言いようがない人間観察力です
「ばれたか・・・まぁお前の事では無いと言えば嘘になるな・・・ある占いというか・・・科学者がな予測したんだよ・・・近々・・・魔王が現れるってな・・・それがお前とかぬかしやがった・・・否

定はできなかった・・・」

「僕が魔王になるとでも・・・？」

口を割る鋳鶴君、冷たく不穏な空気が流れます。

「誰もお前が魔王とは言ってない、私はお前の意見を聞きたい・・・たとえ自分が魔王という事が確定したとしてもそれで周りの人間が死のうと後悔とかしねぇな？それが嫌なら引っ越す」

冷たく言う雅さん、息子には不幸になってほしくない母親らしい部分が滲み出ています

「引っ越しもしない、誰も不幸にさせない、死人も絶対出したりなんてしない・・・魔王になるのは嫌だ・・・でもそれが努力や気をつけるだけで治るとかどうにかなるとも思っていない、魔王になったらの考えだよ・・・それが必然的であったとしても僕は後悔しない・・・僕は家族や・・・僕の事を思ってくれる人達が大好きだから・・・」

「あぁ～あ・・・分かったよそのかわり後悔すんなよ・・・後悔したらブラジルから帰ってきてお前をぶん殴って地球一周させてやるからな・・？覚悟しとけよ！」

「地球一周！？」

地球一周の言葉にびびる鋳鶴君さっきまでの真面目はどこにいったのでしょうか・・・

しかしその答えを聞いて微笑む雅さん、そして・・・医者鞄を持ち出発する準備をしています。

「えぇ！？もう帰るの！？」

「ったりめぇだろ？緊急できてんだ、もう帰る後は任せた他の奴のも伝えといてくれ」

「えっ？なんて？」

「頑張れってな～じゃ！行ってくる～」

あっという間に消えてしまった雅さん、さすが史上最恐のお母さんです！

こうしてさらに鋳鶴君の決心が再び固まりました。

そして

「あいつも８ヶ月で成長したな～・・・」

空中で家族写真を眺める雅さん、寂しいような嬉しいような、お母さんの顔をしています。

ごく普通の母親の顔、それは史上最恐のお母さんがみせた・・・一秒間の笑顔でした・・・

ーーーーーーー陽明学園魔王科某所ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「結様・・・」

甘い声で1人の少女が鳴く・・・

「今日は貴様か・・・さぁ・・・どうされたい・・・？」

不適に微笑む望月家6女の結さん、少女は頬を赤らめながら・・・ただしてほしい事を結さんに伝えます。すると結さんはまた笑みを浮かべ・・・

「いいだろう・・・相手をしてやろう・・・フフッ・・・壊れるなよ・・・？」

「はい・・・んんっ・・・・！」

嫌がりはしません・・・それが彼女の願いなのだから・・・そして女の子は快楽に堕ち・・・結さんのものとなっていくのです・・・

「私には・・・ここしかないのだ・・・ここには沢山の少女が居る、フフフッ・・・・♪」

「鋳鶴・・・ふっ・・・ここでは私は将軍だ・・・弟の事は忘れよう・・・」

こうして・・・魔王科の夜は始まるのです・・・

第１３話：魔王と人類史上おおよそ最強で最恐の母親（後書き）

優しい魔王の疲れる日々！第１３話如何だったでしょうか！作者は最近寝不足でしにそうです！でも頑張ってもっと書いていきたい思います！感想等あればお願いします！確実に発狂します！とにかくいまは寝ようと思います！

第１４話：魔王不在、陽明学園の夜（前書き）

夜の２時の陽明学園・・・その時間には基本は誰も居ません・・・
しかし・・・１人の少女がそこに現れたのです。そしてその少女は
陽明学園の学園長・・・学園長は嘆く、世界に、神に、己の運命に、

第１４話：魔王不在、陽明学園の夜

月が出て良い夜になりました。陽明学園の上には怪しい影・・・白銀に光るものがありました。

「良い月が出ていますね・・・アンリエッタ・・・私の絶望を知らずに・・・夜は月が夜を照らし、朝昼は嫌というほど太陽が全てを照らす・・・私の気持ちも知らないで・・・」

そこには少女が、執事を連れてお茶をしています。

「ジャンヌ様・・・あなた様の絶望はどうしたら治るのでしょうか・・・」

アンリエッタという執事が淡々と言葉を返す、ただ否定文から疑問文になっただけの話、

「私の絶望・・・？世界から悪が消えないということかしらね・・・まぁ・・・悪が無くなったらこの世の中は崩壊するわ・・・」

「確かにそうでございますが・・・」

執事がおどおどした態度で返す肯定しただ受け流す、しかしそこに来た１人の医者は違った。

「悪は消えねぇよ？あんたが悪だしな？」

一瞬で来た。気配を察知されず。執事はいくら普通の人間といえ確実に鍛錬をしている、それなのに気付けぬ速度で・・・医者は来た。

「あら・・・こんな月夜に・・・変なお客さんね・・・」

「そこから一歩でも動いてみろ・・・私がお前を切り捨てる！」

「あ～はいはい、うごかねぇよ男装執事、おい年増。んなアホな事言わず働いたらどうだ・・・？」

「今日はもう働いたわ・・・今日はもう仕事も終わりよ？」

「少しは心配したらどうだ？自分のお気に入りの魔王科をよ・・・」

「心配？なぜ心配しなければならないのかしら？」

「そろそろ歴史が覆る何かが起きるかもしれないぞ？私の言うことは正しいと思うが？」

「男の魔王の事ね・・・知ってるわ、私に知らない事があると思って？確かあなたの息子よね？大変ねあなたもあなたの子供も、男の魔王が居ないのは知ってるでしょ？」

「あぁ・・・３０年前の大戦でしか居ないとは聞いた・・・」

魔王・・・それは全てを破壊しめし滅ぼす者、その者の前には全てが無力ただ、ただただ、無力、残虐以上のもの妻には世界の美女を与え、なにもかもを与えたそして・・・３０年前の魔王が開いた大戦、無敵であった魔王は堕ちた・・・何か説明のつかぬ力で、

「辞典にはそれぐらいしか書いてないわ・・・私にはただの野蛮人

にしか思えないわね・・・」

「あいつが魔王だとしたらどうする？」

「多分殺すわ、覚醒してしまう前に確実に・・・殺す・・・」

「そうか・・・お前の選択か？それとも神のお告げとかほざくのか？」

「えぇ・・・そうよお告げ・・・」

「神なんてホントに居るのか？あたしは信じねぇな、あいつらいざという時見て見ぬふりをして人を見殺しにさたり人を蹴落とす。まるで児戯とはおもわねぇか？児戯をする神もその児戯の神を信じるお前も」

「貴様ぁ！ジャンヌ様を愚弄する気かぁぁぁ！」

雅さんに腰につけた太刀で斬りかかる執事アンリエッタしかしその太刀は雅さんの鉄拳に砕かれた。

「・・・・・・・！？」

「胸ちっせぇな～お前・・・もう少し成長しろ顔も女だしな～」

男装執事の胸を揉みしだく雅さんアンリエッタ執事も動揺を隠しきれません、

「わっ・・・私が・・・触られた・・・？嘘だろ・・・？」

立て膝で立ちつくしたまま震えだす男装執事、それはそうです・・・自慢の太刀筋を見切られたのですから、それを尻目に医者は言う

「お前は若ぇわ・・・３０年前の大戦を経験してねぇクソガキが私に勝てるとおもってんじゃねぇぞ・・？」

「アンリエッタ・・・やめなさい・・・貴方の負けよ・・・そのまま闘えば・・・コンマ１秒かからず彼女に殺されているわ・・・それにしても貴方こそ児戯が好きね・・・人の事言えないじゃない・・・

貴方なら彼女を触れずに殺せるでしょう・・・？」

「あぁ・・・わたしも児戯は楽しむべきだと思うどんな児戯であってもな・・・」

「あら・・・♪奇遇ね、私もそういう意見は好きよ・・・♪」

「んじゃ私は用事あるからこの辺で～」

「ごきげんよう・・・♪」

「あの人は面白いわ・・・私に啖呵をきるなんて・・・」

「申し訳ございません・・・ジャンヌ様・・・私は何も役にたてず・・・」

「いいのよ・・・でもキレるのはよくないわね・・・お仕置きが必要かしら・・・？」

「いえっ！大丈夫です！私は訓練の時間ですので！はい！」

「あら・・・いつの間に1人になってしまったわね・・・まぁいいわ・・・」

あおう言って彼女は夜空を見つめる・・・丸い満月・・・照らす月光・・・彼女は思う・・・

世界は児戯で満ちている・・・

人は神の児戯で出来ている・・・

何もかも児戯・・・

全て児戯・・・

神さえも・・・なにもかも・・・

ジャンヌ・アヌメッサにとっては児戯に等しく無に同じ

それが彼女の生き方・・・

世界で一番神に近いと言われた・・・少女

その頃・・・主人公の鋳鶴君はそんな事があるとはいざ知らず

「あぁ～！もう！皿洗い終わらないー！」

皿洗いをしていました♪

第１４話：魔王不在、陽明学園の夜（後書き）

皆さんかんばんは～・・・ｎです！やっとお気に入り件数登録数が二桁、１０という数にきました・・・！ありがとうございます！そしてこれからもよろしくお願いします！

第１５話：魔王と体育大会にむけて（前書き）

昨日、まるで嵐が来たように散らかった家の掃除や色々すませて大変だったにもかかわらず。
今日も学校の我らが主人公望月鋳鶴＜もちづきいづる＞君、いつもの五人でお昼休みお弁当を食べていると、あの駄眼鏡が・・・来ちゃいました～♪・・・

第１５話：魔王と体育大会にむけて

学校ももう４時間目まで終わりお昼休み、鋳鶴君はいつものメンバーでお食事しています

「昨日は大変だったよ・・・母さんが帰って来てさ～・・・もうホントに大変だった・・・玄関壊すし
ご飯食い荒らすし、母親らしい事をこれっぽっちもしてくれなかったよ・・・」

まるで夫の愚痴を言う奥様です。鋳鶴君の主婦としての才能が開花してしまいそうです。

「あ～・・・雅さん、だっけか？俺もびびるわありゃあ」

「・・・知らぬが仏・・・」

怖さに肯定する鋳鶴君の親友？赤神桧人＜あかがみかいと＞君、そしてお思い出して顔が真っ青になっている赤神君の隣の小柄なカメラ小僧は、これまた親友？の土村影太＜つちむらえいた＞君、二人とも色んな意味で昔雅さんにお世話になったらしく、知り合いの域です。

「俺も世話になったけど・・・やっぱりあの人とは同じ女として一戦交えてみてぇな～」

「荒神＜あらがみ＞、やめておけ・・・敵わない事が立ち会った瞬間嫌でも分かる・・・」

「まぁ・・・そうだけどな・・・」

荒神さんに鋳鶴君のお母さんの強さを教えてあげてるのは、鋳鶴君の幼なじみの三河歩＜みかわあゆみ＞さん、そして女の子なのにだらしなく胡座をかき鋳鶴君のお母さんに興味津々なのは1組のヤンキー少女の荒神麗花＜あらがみれいか＞さん、命知らずにも程があります。

「僕の母はね～・・・強いよ・・・？30年前の英雄の筆頭でもおかしくないし・・・魔王と殴りあった証拠とか写真やらあるらしいし・・・」

「あ～！あれだろ！？高等部の人に聞いた事あるぜ！？最強で最恐のお母さんだろ！？俺の憧れなんだよ・・・」

鋳鶴君のお母さんは一応英雄なのです。魔王討伐軍の1人だったとか、ホント医者の癖して何してんですかねぇ・・・暴れん坊だったらしいですよ？

「さぁて・・・そろそろチャイムが鳴るし全員食い終わったみたいだし・・・そろそろ教室戻るか～」

赤神君の声で教室に戻ろうと支度を始める五人すると皆さんの目の前に・・・

「やぁ！君達！体育大会にでないか！？きっと楽しいぞ～？」

駄眼鏡会長の風間＜かざま＞さんが現れました。相変わらずバカっぽい話方ですねぇ～・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

無視しようとする5人、

「無視！？会長が声かけたのに無視！？ねぇ！お願い！体育大会にでてくれない！？お願いします！」

もう敬語になっちゃってます。これが会長なんですか！？信じられませんねぇ・・・

「体育大会は・・・高等部とか大学部の先輩達を使えばいいじゃないですか・・・」

「あぁ～・・・それがね・・・？みんなびびっちゃってね？ある人をを除いて誰も参加してくれないんだ～♪雛罌粟＜ひなげし＞は出てくれるけどね～それでも二人しかまだ決まってなくてね～？後7人なんだよね～出てみる気ない！？」

「出るっ・・・って言っても中等部じゃ出れないだろう？それに相手は一般の人間の肉体やら頭脳やらが優れてるし・・・」

確かに赤神君の言うとおりです。中等部の人間は普通出ませんそれに普通科はあくまで基本的に普通の人しか居ません、そんな人間達で作ったチームなど他の科の子にとってはカモです。

「いや？中等部でも出れるよ？但し怪我とかするかもしれないけど～」

「あんたの言うことは信じれないな・・・ルールブックとかは無いのか？」

「あるよ？ちょっと待ってね？」

生徒手帳を開きなにやら探し始めました

「これ～」

ーーーーー各科対抗戦争ルールーーーーー

・魔王科は４人、機械科は６人、普通科は９人、魔法科・銃器科・科学科は５人までが参加人数とする。

・トーナメント戦となり二科ずつ闘い勝った方が二回戦に進み、二回戦が終わると決勝戦となる。ちなみに一回戦が終わった時点で人数の少ない科が優先的に決勝シードとなる

・敗北条件は全滅または敵大将を撃破されるかのみである

・大将は各科の会長がやる事

・核兵器、衛星兵器、禁忌魔法、超弩級帆船または戦艦の使用、毒物、殺傷能力のある薬などの使用を禁止する。

・対抗戦争は各科の教室、食堂など全ての場所で放映される

・戦闘場所は旧校舎のみ、旧校舎がなんらかの不祥事で破壊された場合大規模下層グラウンドを使うこと

「だよ？至って簡単でしょ？君達ならできる！っそれに普通科にも

有利にもできてる！
ね！？ね！？」

このルールブックを見て帰りだそうとする5人

「そういえば～・・・豪華賞品もでるとか～・・・後学園長がなんでも願いを聞いてくれるし～」

「参加しよう・・・！」

はやっ！土村君が早速手を挙げました。意志が弱いですねぇ～・・・

「みんな出るよな？な、鋳鶴？」

「みんな出るの！？だったら・・・僕も出ようかな・・・」

意志の弱い五人、＋駄眼鏡と超厳しい秘書なんというドリームチームでしょうか・・・

「さて！チームに入れるのは後、一人！さて！君達には最後の一人をチームに入れてもらおうか！」

「へっ？後一人？二人じゃないんですか？」

「あ～もう一人は今決まったから～♪」

「誰ですか？」

五人が言葉を揃えて言う、そして・・・

「鈴村詠歌さんです～これで後一人！赤神君が出ると聞いて出てくれるってさ」

「はめられたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

これこそ絶望ですね、今の赤神君はムンクの叫びにも負けないほどの叫びを放っています。

そして最後の一人の名が会長から発表されました

「ーーーーーー城屋誠ーーーーーー」

「あぁ～あ・・・何かおもしれぇ事ねぇかな～・・・・どの科も弱ぇ奴ばっかりで、つまらねぇったらありゃしねぇ・・・暇だ・・・」

人の山の上に立つ男・・・金髪髪、乱れた服、胸のアクセサリー、

うっわぁ・・・不良～・・・

第１５話：魔王と体育大会にむけて（後書き）

第１５話如何だったでしょうか！感想、コメントなどもらえたらうれしいです！
次回からまた新キャラ登場です～

第１６話：魔王と普通科最強の不良（前書き）

城屋誠＝普通科最強の不良、敵う者は基本居ない、小さい者や小さい物が好きいわゆるミニコン？しかし見た目は残念な程に不良である。

第１６話：魔王と普通科最強の不良

「結局・・・僕1人か・・・友達ってだけでわなぁ～・・・厳しいよな～・・・・」

ため息をつく鋳鶴＜いづる＞君、そう何を隠そう！鋳鶴は城屋誠君と友達なのです！理由は知りませんが・・・まぁ・・・鋳鶴君も昔はグレてたらしいですしねぇ～・・・・

そんなこんなでもう城屋さんの所に着いてしまいました。

「鋳鶴か～？何しにきた？」

「また・・・今度は魔法科の生徒！？さすがにまずくない！？」

「まずかねぇよ・・・俺は魔王科以外には手を出してる、今更怖じけずきゃしねぇよ」

男前です。でも無駄にヤンキーな城屋さん、

「俺が普通殴る奴は普通科を馬鹿にした奴だしな、基本的に迷惑はかけてないと思うぞ？俺は悪くねぇし、」

「殴るのは良くないから！あぶないし、手痛くなるし、怪我するし」

「変わったな・・・お前・・・昔はお前の赤髪に染めて・・・魔王とか自分で言ってたのによぉ～・・・・」

「それは昔！今は今！勝手に人の思い出したくない過去ほじくるのやめてくれる！？城やんはいっつもそうだよ！それに・・・その記

憶はやっぱり思い出したくないよ・・・」

「あっぁぁ・・・ごめん・・・」

悪いことしたのを反省する・・・城屋さんは良い不良さんですねぇ・・・後鋳鶴君は、昔は不良だったんですよ？はい！

「んで？俺に何か用でもあんのか？あの馬鹿の頼みかなんかかは重々承知だけどな～」

「体育大会に出て欲しいらしいんだけど～・・・城やん出る気ある・・・？出たくなければいいんだけど・・・」

「体育大会か～・・・祭か～・・・高校生になって球技大会でてなかったしな～・・・今年は何するんだ？去年は出てねぇからしらねぇけど」

「今年はね～はい！これ」

ーーーーー各科対抗戦争ルールーーーーー

・魔王科は４人、機械科は６人、普通科は９人、魔法科・銃器科・科学科は５人までが参加人数とする。

・トーナメント戦となり二科ずつ闘い勝った方が二回戦に進み、二回戦が終わると決勝戦となる。ちなみに一回戦が終わった時点で人数の少ない科が優先的に決勝シードとなる

・敗北条件は全滅または敵大将を撃破されるかのみである

・大将は各科の会長がやる事

・核兵器、衛星兵器、禁忌魔法、超弩級帆船または戦艦の使用、毒物、殺傷能力のある薬などの使用を禁止する。

・対抗戦争は各科の教室、食堂など全ての場所で放映される

・戦闘場所は旧校舎のみ、旧校舎がなんらかの不祥事で破壊された場合大規模下層グラウンドを使うこ

「出るぜ！戦争か！俺の得意分野だ！それにこれなら手加減無しに人をぶん殴れそうだしな！俺は出るぜ！馬鹿に伝えておけ！」

「了解！じゃあ伝えとくね～またね城やん！」

「お～い・・・まったく元気になっちまって・・・あの頃に比べれば全然まともになったな・・・赤髪の魔王と金髪の阿修羅か・・・懐かし・・・さぁて！体育大会まで鍛えるか！」

こうして鋳鶴君は城屋さんをチームに加え、９人規程人数をクリアし戦力も充分！後は体育大会までの下準備だけです。そすそうたる馬鹿達のきょうえ・・・じゃなくて・・・そうそうたる普通科メンバーです！

・望月鋳鶴
・赤神桧人
・土村影人
・三河歩
・荒神麗花
・鈴村詠歌

・風間一平
・雛罌粟涼子
・城屋誠

「後は作戦か～・・・雛罌粟＜ひなげし＞～作戦プランよろしく～」

「お任せ下さい、面倒ですが一応頑張ってみましょうか・・・」

「今年は勝よ～・・・普通科の天下をとる！勿論僕が大将でね！」

この駄眼鏡は・・・でもやっぱりこの馬鹿が居ないと普通科は成り立ちません！それがこの男の力というか、雰囲気というか・・・

第１６話：魔王と普通科最強の不良（後書き）

第１６話いかがだったでしょうか！今回はかなり行を少なくしています・・・
次回はまだ考え中です！

第１７話：魔王と魔法科生徒会長、虹野瀬縒佳（前書き）

城屋さんを仲間に加え、普通科の敷地内に戻ろうとする鋳鶴＜いづる＞君、その帰り道の途中いつもの道には居ないはずの人が・・・

第１７話：魔王と魔法科生徒会長、虹野瀬縒佳

城屋さんをメンバーに加えて、任務を果たした鋳鶴君、今は５時間目の途中だというのに歩いて教室に帰っている途中です。いつも通る訳ではない道しかし校内なので彼にはどう普通科の校舎まで行けばいいかは分かっています。

「５時間目か～・・・うわぁ・・・英語かぁ・・・さぼろうかな～・・・体育大会の用事で遅れましたって言えばいいしな」

鋳鶴君ゲスモードに入ってしまいました。このうえなくゲスです。中学生でそんな事を思いつくなんて・・・親の顔が見てみたいですねぇ・・・

トボトボ歩く鋳鶴君色んな事を思い出しながら帰ります。過去の事や今日起きたこと、色んな人との出会いや様々なまぁ・・・不幸な事を思い出しながら色んな意味で自分が可哀想と思い始める鋳鶴君、しばらく歩いているとそこには・・・・

綺麗な花園がありました。

美しい・・・それでは足りない、美しいを陵駕した美麗、こんな美麗な花園は鋳鶴君はみたことありません、すると・・・園の丁度中心でお茶をしている貴婦人の様な女性を見つけました。

「あら？こんな所に生徒がごきげんよう」

そこにはびっくりするほど綺麗でお人形さんみたいな女性が居ました。

「こっ、こんにちは！」

「どちらの生徒さん？ここは魔法科の敷地内よ？」

「すっすいません・・・ちょっと急いでて・・・」

「あら、それでは伝えておかないと・・・お友達の皆さんや先生方が心配してらっしゃると思いますし、お名前と何科かとあと何年何組かを教えてくださる？」

「普通科中等部3年1組の望月鋳鶴です！」

「望月鋳鶴、良い名前ね♪親御さんがよく考えたんでしょうね♪」

「えぇ・・・まぁ・・・はい・・・」

びびってます！鋳鶴君びびってます！こんな綺麗なお姉さん見たことが無いのでしょう・・・かなりのびびり様です。

「あっ！私は虹野瀬縒佳＜にじのせよりか＞魔法科高等部2年で生徒会長をしています♪以後お見知りおきを、貴方は体育大会に出るのかしら？」

「教えるわけにはいきませんよ！対決してからのお楽しみですし、それに駄眼・・・じゃなかった！会長さんに口止めされてますし！」

「そう♪貴方も出るのね。だって知っているということは出ることじゃない♪」

「あぁー！言っちゃった・・・僕って馬鹿だなぁ・・・・」

「自分を責めないで、教える会長が悪いもの」

「そうですよね！そうです！」

駄眼鏡に押しつける鋳鶴君、何気に酷いです。

「僕はそろそろ行きます。また今度！でわ！」

普通科の敷地内にまで走っていく鋳鶴君それを後ろから見る虹野瀬さん、妖しい笑みを浮かべニッコリと微笑む、その彼の走りを見ている女性はその少年に向かって囁いた・・・

「彼が・・・魔王なのね・・・面白そうな子じゃない・・・私の楽しみが増えたわ、それに・・・私の使いや下僕にも使えそうね・・・魔王だなんて・・・面白い怪奇じゃない・・・私そういうのだ～い好き・・・」

彼には一言も聞こえていない

不適な笑みを浮かべる女性・・・高校生離れした身体、顔、性格、彼女は怪奇現象や奇妙な事が大好き、それは彼女自体が怪奇だから・・・彼女は・・・

「魔王を手に入れるのは私でしてよ？貴方には勿体ない」

口を挟む女性、それに答える怪奇

「私は何だって手に入れるわ・・・貴方も私の部下じゃない・・・貴方の怪奇は私のモノ私の怪奇は私のモノだって私は小さく重い器の女なのよ・・・？自分に怒る怪奇だけじゃ満足出来ないわ・・・魔法科にももう飽きてしまったし・・・」

「貴方も私も教師クラスですしね・・・貴方が私より年下なのが腹立たしいですけどでも現時点では貴方が会長な訳だし・・・貴方に任せるわ・・・でも私は貴方と同意見よ？」

「何が？私と貴方の同意見なのかしら？」

「３つあるわね・・・１つめはお互いが一番魔法科で偉いという事を自負している事、２つ私も貴方もここ「魔法科」にうんざりしている事、」

「３つ目は何かしら？早く言って欲しいのだけれど？」

「どちらも魔王を必要としている事・・・」

「結局取り込もうという事・・・でも・・・過激な事は出来ませんわ・・・私お嬢様ですし・・・ランキングにヒビは入れれませんわ♪でわご機嫌よう♪」

「ランキングねぇ・・・私は2位くらいだったかしら・・・まぁ・・・寿よりは上だから満足するとしましょう・・・」

第１７話：魔王と魔法科生徒会長、虹野瀬縒佳（後書き）

第１７話！出来ました・・。学園長・・・そろそろ出したい・・・しかし受験生なもので時間が無い！一応虹野瀬さんは超美人ってことで！詳細に表現できなくてすいません！次回は時間があれば書きます！感想等あればよろしくお願いしまっす！

第１８話：魔王と城屋さんの過去と2年前に起きた抗争（前書き）

魔法科の超美人で生徒会長の虹野瀬＜にじのせ＞さんに魔法科の秘密の花園で出会った鋳鶴君、気分は有頂天しかし？
今日は５時間授業だったので今日の授業は終わってしまい清掃時間しかし・・・

第１８話：魔王と城屋さんの過去と2年前に起きた抗争

チャイムがなり清掃時間、鋳鶴＜いづる＞君は早速先生に授業をサボった事がばれ白鳥先生にめちゃめちゃに怒られています。

「もう！先生心配したんですからね！？もう・・・体育大会の為とか言って、先生の授業さぼろうとしたんじゃないの～？」

ちなみに白鳥先生は英語と理科の先生をしています。先生としても普通科の皆さんにとっても憧れの的であり仲裁役であったりいいお姉さんでもあるんです。

しかし・・・白鳥先生の場合同姓はいいのですが・・・彼女のまぁ・・・巷でいうモデルさん並のルックスと抜群のスタイルなので男子は基本イチコロです。

特にお説教の時、先生は相手に寄ってお説教をするのではち切れんばかり上半身のモノ二つが生徒の前にいくのです・・・普通の男の子で緊張すれば鋳鶴君はさらに緊張しますし、土村君なんて全身から血を吹き出し死ぬでしょう。

「いやっ・・・その・・・さぼりたかったというか・・・忙しかったというか・・・」

顔が真っ赤な鋳鶴君、そりゃそうですよ・・・鋳鶴君だって男の子なんですから！

「もう！先生は怒っているんですからね！私は宿題や忘れ物してもあまり怒らないけど、サボるのだけは許さないんだから！ど・う・し・て・サボったの！？」

「体育・・・体育大会の打ち合わせというか僕は僕なりの体育大会任務というか・・・押しつけられたというか・・・義務というか・・・だからその・・・」

「何か理由があるんだったら先生聞くけど・・・？」

「体育大会の最後のメンバー収集に行ってて・・・城や・・・城屋誠さんに会ってきて・・・勧誘を・・・てか近い・・・胸が・・・」先生の胸と顔が鋳鶴君の前にあります。先生はその名を聞いて顔を青ざめました・・・

「城屋誠君に会ったの！？超問題児なのよ！？よく無事で・・・でも彼は戦力になるわ！私の防御魔法人を異能で破ったのよ・・・普通科に異能力者が居るなんて思わなかったし・・・私も歳かなぁ・・・それとも恋とかしてないからかな～・・・」

「そっそうでしょうか・・・でも城やんと僕は一応親友ですし・・・」

「親友なの！？喧嘩しないほうがいいわ・・・親友だとしても怒らせたら大変よ？彼は普通科最強でもあるけど他科でも彼に喧嘩勝そうなのは会長クラスだけだし・・・先生は基本生徒に攻撃は厳禁だし・・・後城屋君の能力を教えてあげるわ・・・」

ゴクリとのどを鳴らす鋳鶴君、緊張がはしります・・・彼も城屋さんに異能があったことは知りません、それに彼は普通科、異能があるのなら他科へ行っています。そして、先生が眼鏡を中指で上げ直し・・・その重い口を開きました。w

「「鬼」よ・・・」

「鬼・・・？」

皆さんは鬼をご存じだろうか・・・はいあのツノの生えた赤と青とか虎のパンツとかはくひとです。
語尾にだっちゃなどつける鬼も居るとか居ないとか・・・
しかし普通の鬼なら金棒に鬼のパンツそれに角や赤い肌など・・・
しかし城屋さんにそのものは何一つついちゃいません。

「そうでも本物の鬼じゃないわよ？鬼みたいに見えるけれど、筋肉が膨張したり鬼の様な魔術みたいなのを使えるのよ」

「でも魔法科じゃないのはなぜなんですか！？」

「それは・・・彼が魔法科で暴れすぎて魔法科から普通科に追い出されちゃったからよ・・・」

「どうして？魔法科には異能を持った人が沢山居て、その人達を管理してるんじゃないんですか！？」

「けれど・・・彼はそれでも抱えきれない問題を起こしたのよ・・・色んな意味でね・・・勿論授業態度も悪かったし・・・喧嘩もしたわ・・・でもね・・・一番の事件は貴方達も聞いたこともあると思うけれど・・・あなた達今の何処の科でも中学1年生の頃に入る頃に起きた色んな意味で学園抗争・・・
第一次魔法科学園内抗争・・・」

「僕らが一年の時・・・」

一年の時・・・鋳鶴君は思い出す・・・城屋さんを止めれなかった自分が居て・・・魔王と自ら名乗っていたあの頃、大切な物を失って自分も抗争を起こしかけたあの頃、

「彼にはお姉さんが居るの・・・でも事件は起きてしまった・・・体育大会があるでしょう・・・？あれでね・・・城屋君のお姉さんが不慮の事故で足を失ったの魔法科生徒がね・・・勝つためにお姉さんもろとも校舎と相手を今では禁止されている禁忌魔法の一種で吹き飛ばしたの・・・それからね・・・戦争が起きたのは・・・それで城屋君は激昂し・・・その魔法科生徒とその場に居た魔法科の大会参加者、止めに入った先生、勿論私は止めたけど軽傷で済んだ・・・私だけは・・・」

「先生だけ・・・？その場に居た他の人は・・・？」

「全員骨折やら・・・それ以上の怪我やら・・・禁忌魔法を使った生徒は・・・半殺しよ・・・終わった頃には身元もつかないぐらい・・・顔が腫れていて・・・首から上の骨と骨髄以外は粉砕骨折、または複雑骨折・・・酷かったわ・・・戦争よ・・・彼が今でも鬼神と呼ばれているのはのはそれね・・・
あれは人じゃない・・・自我の無い怪物・・・彼の従兄弟が居なかったら・・・私も此処にいなかったかも・・・資料室にビデオがあるわ・・・」

「え～、普通科の体育大会代表生徒９名は生徒会室に来るように～以上会長からでした～」

駄眼鏡の臨時放送が入る、相変わらず空気よめませんね～・・・

「資料室に行って・・・望月君には見る義務がある・・・見てあげ

て・・・風間君には伝えておくから・・・行っておいで」

「はい・・・」

先生は教室からの電話で生徒会室に連絡をする・・・鋳鶴君には資料を見てもらわなくてはならない・・・暴走した異能者というものを・・・

僕は見なくてはいけないのか・・・？見なければならないのか・・・？自分の親友の見られたくない所と思われる所を・・・罪悪感しか彼の周りを廻らない、ただただ罪悪感、隠しきれない嫌悪親友の秘密・・・彼は言いたくないであろう秘密・・・

そして望月鋳鶴は・・・立ち止まった・・・

第１８話：魔王と城屋さんの過去と2年前に起きた抗争（後書き）

第１８話如何だったでしょうか・・・相変わらず自分は未熟と思うばかりです・・・やっぱり楽しんでいただけるような物をもっといっぱい書いていきたいです！次回はすぐ更新したいと思います！でわでわ～・・・

第１９話：魔王と城屋誠そして体育大会一回戦の発表（前書き）

城屋さんの事で頭がいっぱいの鋳鶴そして・・・二年前の抗争映像を見て・・・

体育大会の一回戦！ついに発表です！

第１９話：魔王と城屋誠そして体育大会一回戦の発表

望月鋳鶴は迷っていた・・・自分のすべき事に、自分のこれからする事に罪悪感、嫌悪感、ただただ・・・それが廻る無限に不条理に自分を救ってくれた人の見られたくない過去を見る、

嫌悪

嫌悪

嫌悪

嫌悪

廻る廻る廻る廻る・・・思考が想いが募る。ただ募る重い扉を開ける資料室のいつもは軽い扉いつもは開けるのに2秒もかからない・・・

しかし重い・・・まるで・・・とてつもなく重いものを持ち上げるような感覚・・・

「資料室の奥・・・南京錠の掛かった扉この奥に極秘資料が・・・」

南京錠を開け奥に入っていく・・・その先にまた南京錠のついた扉・・・また・・・また・・・

何枚開けたか分からないが奥についた最後の扉の向こう何枚かある資料の中から「鬼」とだけ書かれたＤＶＤカセットを取り出すそして近くにあるＤＶＤレコーダにＤＶＤカセットを差し込みテレビを

つけた。

そこには二年前の魔法科の校舎・・・映ったとたんその校舎の一部分が損壊した。

「皆さん！ご覧下さい！鬼が！鬼が暴れています！」

眼鏡をかけた生徒らしき男がビデオで抗争の状況を撮っている。

「ウオォォォォォォォォォォォォォォォォォ！貴様ラ・・・姉サンノ足ヲ返セ・・・サモナクバ・・・世ノ全身全霊ヲ用イテ貴様等ヲ鏖ッテクレル・・・」

その言葉を鬼が放った時・・・血飛沫をあげで・・・1人の生徒が倒れた。そこで見るのをやめた・・・

人が死んだかは分からないが・・・多分死んだ・・・あれが抗争・・・暴走した異能者・・・ピントがあっていないが分かるカメラで撮った中央に撮されていた禍々しいオーラを放っているのが城屋誠ということをあれが人の理性を無くした異能者、一時の感情の揺れに起きた暴走、自分は魔王と言われていた。実際にいうと魔王と自分で言い自覚し、謙遜すら無かった自分があのとき過去にこうなる前に止められていなかったらと思うと震えが止まらなくなる・・・

「城やん・・・言わなきゃ・・・ありがとうって・・・僕はまだ言ってない・・・救ってくれたのに・・・お礼を言ってない・・・」

自然に涙が溢れる涙腺が肥大化し涙が溢れる・・・あの頃・・・魔王と名乗っていた頃に流れなかった事を悔やみながら、あのころか

ら二年経った今でもあの頃ありがとうと言えなかった事を恥じるように泣いた・・・

「生徒会室にそろそろ行かないと・・・大分遅れちゃったな・・・」

涙を拭き生徒会室へ急ぐ鋳鶴君、その頃生徒会室ではというと・・・

「暇すぎる！詠歌＜えいか＞！離れやがれ！畜生！なんで体育大会に出るなんて言ったんだ俺はー！」

「私は後悔してないよ～？私が危なくなったら桧人＜かいと＞が守ってくれるしね～いっつも私の事守ってくれるもんね～」

「あー！鋳鶴！早く来やがれ！」

「リア充・・・爆発させる・・・！」

起爆剤を取り出す土村君、その隣に居るのはスケバンの荒神＜あらがみ＞さん、

「土村～鋳鶴はまだか～？俺は腹へったんだけど・・・メロンパン買ってきてくんね？金はもちろんお前持ちで♪」

その飛ぶ鳥を落としかねない目付きが今日の荒神さんにはありません、しかし土村君がパシリにされかけています。

「断る・・・！俺はこの世の非リア充の味方だ・・・！目の前で起こっているリア充の不順異性好意を無視しろと・・・！？俺は・・・！この世の・・・！」

「うるせぇな！てめぇはグダグダうっせぇんだよ！そういうの見るのが嫌ならさっさと彼女でも作っていちゃいちゃしてやがれ！」

「むっ・・・！？」

いちゃいちゃという言葉に動揺し口から血を出しかける土村君しかし鼻からの血は止められませんでした。

「うるさい！お前等！少しは静かにしろ！会議にならんだろうが！少しは雛罌粟＜ひなげし＞さんの手伝いでもしろ！」

歩さんがブッチしてしまいました。

「私はいいわ、もうすぐ終わるから早くみんな席に着いてもうそろそろ来る筈よ」

「はいは～いみんな座ってね～もうすぐ鋳鶴君来るから～」

そう言うと会長の駄眼鏡はカウントを始めました。

「はい！「5」「！」

「4！」

「3！」

扉が開きそこにはいつもの見慣れた汗だくの彼が

「遅れました！すいません・・・お説教されてて・・・」

「別に構わないさ、３秒早かったかな！さてと！会議会議！」

「えぇ～とね～みんな居るね？今日は体育大会の一回戦の相手が発表されたよ～これがその標だよ～目を通しておいてね～？あとルールものせておくね～？」

一回戦：魔王科ＶＳ銃器科

魔法科ＶＳ科学科

普通科ＶＳ機械科

ーーーーー各科対抗戦争ルールーーーーー

・魔王科は４人、機械科は６人、普通科は９人、魔法科・銃器科・科学科は５人までが参加人数とする。

・トーナメント戦となり二科ずつ闘い勝った方が二回戦に進み、二回戦が終わると決勝戦となる。ちなみに一回戦が終わった時点で人数の少ない科が優先的に決勝シードとなる

・敗北条件は全滅または敵大将を撃破されるかのみである

・大将は各科の会長がやる事

・核兵器、衛星兵器、禁忌魔法、超弩級帆船または戦艦の使用、毒物、殺傷能力のある薬などの使用を禁止する。

・対抗戦争は各科の教室、食堂など全ての場所で放映される

・戦闘場所は旧校舎のみ、旧校舎がなんらかの不祥事で破壊された場合大規模下層グラウンドを使うこと

「城やんも憶えておいてね～？ルール憶えるの大変だと思うけど・・・頑張って憶えてね？」

「やっぱ・・・俺、出るのやめていいか？」

その場の空気が凍り付く

「なんで！？城やん！もう登録しちゃったしね？出てくれないと困るんだけど・・・何か理由でもあるのなら別だけど・・・？」

「なんもねぇよ・・・てかてめぇはわかんだろ・・・？雛罌粟もなぁ・・・」

場が静かにただただ凍り付くそこに口を開けた者が1人・・・

「城やん・・・お願いだよ・・・出てくれない・・・？君が出てくれないと・・・」

「鋳鶴・・・てめぇは何もしらねぇくせに馬鹿な事言ってんじねぇよ・・・てめぇには何もわからねぇんだろうな・・・」

「知ってるよ・・・二年ま・・・」

ドゴンッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

鋳鶴君の首隣、ミリ単位で教室の壁に穴が開く・・・一撃で・・・

「何で知ってるかしらねぇが・・・次言ったら・・・ぶっ殺すぞ・・・？たとえお前でもなぁ！」

「何度でも言ってやるよ！二年前・・・君は暴走して魔法科の校舎を半壊させたんだろ！？お姉さんの為に闘って狂ったのは知ってる・・・それがトラウマなんだろ・・・！城屋誠！」

「ベラベラ語りやがって・・・俺を本気で怒らせたな・・・？」

「みんな！逃げてほしいな・・・？雛罌粟、みんなを安全な所へ・・・普通科の敷地内から生徒と教職員を全員退避させてくれ？任せたよ？」

「了解です・・・皆さん、さぁ早く・・・」

「何いってんだ！鋳鶴が！おい！」

「巻き込まれるだけです。それに啖呵を切ったのは彼です。皆さんは退避してください、会長は後で退避すると思いますので・・・」

「・・・鋳鶴・・・」

「さぁて・・・安心しろ・・・お前なんか一撃で終わらせてやるよ・・・」

もうもぬけの殻となった普通科校舎、そこには二人の男しか居ません、

「君には出てもらわなきゃいけない・・・！出てくれるまでは倒れない・・・！」

その言葉を発した数秒後、魔王の鳩尾に鬼の右拳が入った。

第１９話：魔王と城屋誠そして体育大会一回戦の発表（後書き）

第１９話！いかがだったでしょうか感想などどしどし送ってください！そろそろ番外編などなど書きたい気もします・・・次回は２０話か番外編です～

番外編：嘘つきスケバン狼少女とエロブリティッシュ（前書き）

今では仲良し？の二人そんな二人の出学校の帰り道、荒神＜あらがみ＞さんと土村＜つちむら＞君が仲良く帰っています。相変わらず青春してますね～♪今日はそんな仲の良い二人が出会ったばかりの時のお話・・・

番外編：嘘つきスケバン狼少女とエロブリティッシュ

それはある日の夕暮れ時エロブリテッシュと荒神さんが仲良く帰っています。

「あ～♪うめぇ～！あんみつうまいな～♪土村食うか？」

「・・・お前の唾液が付着したものを食えと・・・？」

「いらねぇのか？俺が全部くっちまうぞ？」

「あんみつ・・・！俺の好きなものを・・・！」

「ホントは食いたいんじゃねぇ～の～？」

「・・・・いらん！」

怒りに震える土村君、しかし怒りたくても怒れません、荒神さんの方が遙かに強いですしねぇ～

「みたか？球技大会の俺のサヨナラホームラン♪凄かっただろ？」

えへんと無い胸を張る荒神さん、それ対し土村君はというと・・・？

「たいして凄くない・・・無い胸を張っても意味をなさない・・・」

「あぁ！？今なんつったぁ！？」

「なっ・・・何も・・・」

あまりの恐喝にびびる土村君まさにカツアゲする人とされる人です。

「まぁ・・・今年もお前と同じクラスか・・・今年もよろしくな♪」

「・・・願い下げだ・・・・！」

「白鳥先生隠し撮りしたの先生にばらすぞ・・・？」

「・・・うれしい！・・・」

まさにする人とされる人です。

「お前は昔っからかわらねぇな～・・・」

それは今やコンビの様になってしまった嘘つきスケバンとエロブリテッシュの昔のお話・・・

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「こんな所にまぁ・・・屑が・・・」

柄の悪い少女が溜まり場に居る柄の悪い人にからむ

「あぁ・・・・？てめぇ！荒神麗花か！ちょうどいい・・・ボコってやるよぉ！」

5分後

その男は彼女の右ストレートの前に沈んだ。

「けっ・・・ボコられたのはてめぇのほうじゃねぇか・・・けっ・・・」

彼女の名前は荒神麗花、嘘つきオオカミのスケバン少女

「あぢぃ～・・・暑すぎるぞ・・・」

学校の屋上で真っ昼間から授業をサボって居る人が居ますそれにしても・・・2年生でも荒神さんはバリバリヤンキーですねぇ、誰も居ない屋上でスカートをパタパタしています。すると・・・カシャ！っという音がしました。

「誰だ？俺になんか用でもあんのか？」

何もありません、すると？

荒神さんは自分の5m先に少しもりあがったビニールシートを見つけました。それを捲りあげると・・・

「俺が・・・！ばれた・・・・・・・・！？」

そこには見るからに盗撮魔・・・ではなく小柄な少年が居ました。

「おいてめぇ・・・俺の事盗撮してたのか・・・？あぁ？」

「違う・・・無い胸を撮る気は無い・・・！」

どこからかブチッ！という音が響いてきました。

「てめぇ・・・なめてんのか・・？」

「・・・なめてはいない・・・お前の事は言えないがなぜ授業をサボる？」

「そりゃめんどくせぇからだよ！てめぇはなんでサボッてんだよ」

「カメラ等・・・備品の整理・・・」

「盗撮用のか？」

「・・・ッ！観察用・・・！」

顔に思いっきり盗撮用とか浮き出てます。まったく隠せていませんね～

「ったく・・・まぁ・・・ほぉっておくか・・・」

そして荒神さんは寝てしまいました・・・土村君は階段の途中でボソリと

「あれが荒神麗花・・・なんとかしないと・・・一仕事・・・仕事料は盗撮した美脚写真でいいか・・・」

と呟きました・・・
今やエロブリテッシュがスパイみたいな事をしています・・・流石盗撮魔ですね～・・・・
荒神さんはいっつも一人・・・ご飯も1人、授業中も彼女に話しかけてくれる人は居ません。
喧嘩も1人・・・仲間なんて邪魔なだけです。でも最近彼女には友達ができそうなのです。
彼女は友達が欲しいという感情が生まれてきたのです。
「よぉ♪土村♪俺に何か用か？」
荒神さんが答えるすると土村君は・・・？
「特になにもない・・・今日もカメラの手入れ・・・」
いつもどうりに返します言葉のキャッチボールってやつですかねぇ～、
そして屋上への一つだけの扉が開きました。
「ほぉ～こいつが影太＜えいた＞の彼女か～」
「彼女・・・！？そんなはずない・・・！誰がこんな不良女に・・・！」
「今、不良女とか言ったかてめぇ・・・？」
「桧人＜かいと＞・・・荒神さんだよ・・・？」

「どうした鋳鶴<いづる>～ビビッたか？」

２年生の頃の赤神<あかがみ>君と鋳鶴君がが顔を出しました。

「俺は２－４の赤神桧人こいつは俺のクラスメイト兼クソ野郎の望月鋳鶴だ」

「クソ！？今クソって言った！？僕が何したっていうのさ！」

「じゃあお前が赤神で？お前がクソか♪」

「違う！望月！望月でいいから！」

「まぁいい俺達二人は一応お前とも同じクラスだ。よろしくな、荒神」

「おう！よろしく！」

その二人の出会いから二週間が経ち・・・

昼食も四人一緒で食べる程仲良くなり友達同然のような会話もするようになりました。

その帰り・・・荒神さんはいつものように1人で帰っていく所でした・・・雨が降っていたのにも関わらず傘が無くビショビショになってる荒神さん、いつもの帰り道を普通にあるいていました。

「よぉ～荒神ちゃんよ～・・・俺の部下をやってくれたらしいじゃん？」

明らかに柄の悪そうな人達が4、5人が荒神さんを囲いました。し

かし荒神さんは立ち向かいます。

「かかってこいよ・・・どうせこの前の奴等の仲間だろ！？てめぇらみてぇなバカでクズな奴はぶっ飛ばしてやる・・・！」

「ッ！！！！このアマァァァァァァァ！」

５０分後

その場にはもう・・・柄の悪い人達ではなく・・・その人達にボコボコにされた荒神さんが居ました・・・

「けっカスが行くぞてめぇら！なんだこの無駄に可愛いストラップはぁ？それにかわいい系の服の雑誌ぃ～？お前みてぇなクソ女にゃにあわねぇよ！ボケ！」

さらに柄の悪い人たちは荒神さんの鞄の中の物のほとんどをぐちゃぐちゃに壊してしまいました・・・

ボロボロにされた制服・・・体の多量の傷・・・グチャグチャに踏みにじられた母との思い出のストラップ

彼女は心の中で感じた・・・

ー俺は・・・人を殴ることしかできないんだ・・・

ー俺は・・・弱いんだ・・・

ー俺は・・・可愛い服着たり可愛いものを好きになっちゃいけないんだ・・・

ー俺は・・・荒神麗花じゃないといけないんだ・・・

ー俺は・・・

次の日、荒神さんは陽明学園にこなかった・・・なぜかはしらない、誰も・・・そして荒神さん無しで今日も学校が始まる。

「荒神さんは怪我で入院だそうです。後土村君は家庭の用事で休むと連絡がきました」

先生の心無い言葉・・・誰も荒神さんがいない事を気にしませんしかし二人は違った・・・

「桧人・・・おかしい・・・二人とも居ない・・・怪しいよ！」

「気のせいだろ・・・？ん？影太からメールが着た」

生徒手帳にメールが来たことを確認し生徒手帳を開く桧人君、

ＦＲＯＭ土村影太
今日急用が出来てしまった・・・
ゴミ処理の手伝い・・・
先生には休むと伝えておいた・・・
くれぐれも来るなよ・・・？

危険なゴミ処理だ俺の家は貧乏・・・
ただの荒稼ぎ・・・

「行くか・・・ゴミ処理場・・・鋳鶴、もちろん行くよな？」

「行くに決まってるよ・・・こういう時の影太は1人でやろうとするからね！」

すると2人は立ち上がり。

「先生ー！鋳鶴がデート行きたいから早退するそうですー！ちなみに俺は具合が内蔵から胃液出るくらいやばいんで早退しますー！」

「デート！？意味分かんないし！歩！？どうして怒るの！？あれは桧人の嘘だから！信じちゃ駄目だから！僕は不順異性交遊してないってー！」

「ちょっ！君達！待ちなさい！」

「誰が待つかハゲ！って鋳鶴が言ってましたー！」

「僕何も言ってませんからね！？信じてください先生ぃ！」

その頃学校での出来事を知らない土村君は病院に居ました・・・

「・・・昨日は一緒に帰れば良かった・・・俺はバカだ・・・」

「バカじゃねぇよ・・・・悪いな・・・見舞いなんかきてくれてよ・・・」

いつもの轟々しい荒神さんの姿はそこには無く・・・弱々しくなっていました。

「俺がバカだったんだよ・・・ごめんな・・・くだらん心配かけて・・・ほんっと・・・俺ってつくづくバカだよな・・・」

何も返せなくなる土村君、その時、ふとゴミ箱に視線がいきました。

ボロボロの普通の女の子が見るようなファッション雑誌、ボロボロにされた子犬と子猫のキーホルダー泥水に浸った鞄や、いつもはみない髪留め・・・

そして・・・いつもは見せない彼女の目から滴り出る涙・・・

「荒神・・・少し急用が出来た・・・すまないな・・・また後でくる・・・」

「おう・・・いってこい・・・」

走る土村君、その身体の中にある怒りの感情を抑えながら・・・あの柄の悪い人達の居場所は知っている・・・だから走る・・・彼女のあんな顔は見たくないから・・・

「はぁはぁ・・・！中央病院！やっと・・・やっとついた！」

やっとついた二人そして走って院内に入り荒神さんの病室の場所を聞きそこえ向かいました

「おい！荒神！土村は！？」

「あいつなら・・・用事があるとか言ってどこかに行ったよ・・・」
「場所は・・・わからねぇか・・・仕方ねぇ・・・鋳鶴！俺はとにかく検討のある場所に行く！荒神の事は頼んだ！」
「あっ・・・うん・・・」
急いで病院から出て行く赤神君、荒神さんの病室の中には鋳鶴君と荒神さんしか居なくなってしまいました。
すると鋳鶴君はゴミ箱の中身に気がつきました。
「影太の事は荒神さんはどう思ってるの・・・？」
「普通・・・」
いきなり言葉に詰まる鋳鶴君、貴方主人公でしょ！？しっかりしてください！
「荒神さんはオシャレとかしないの・・・？」
「しねぇよ・・・そんな女々しい事するわけねぇだろ・・・」
「しようよ！きっと荒神さん可愛いと思うよ！顔も整ってるし髪も長いし！」
「お前さ・・・俺が何されたかしってんのか・・・？何もしらねぇなら声かけるのやめてくんねぇかな・・・正直言って・・・うぜぇ・・・」

友達は要らない・・・居たら私は荒神麗花で居られなくなってしまう。

友達なんて要らない・・・

オシャレなんてめんどくさいだけだ・・・

俺はこのままでいい・・・

強い俺が俺は好きなんだ・・・

「そんな事言うなよ・・・だったら聞き返す・・・」

鋳鶴君は真剣な眼差しで荒神さんを見て答える

「お前は何で影太が今日学校あるのにここに来たか分かってるのか？」

そうあいつはここに来た。しかしあいつは急用で学校を休んだと聞いた。しかしこいつらは何でこんなに真剣なんだ・・・？土村が居ないだけだろ・・・？それだけでなぜ・・・？

「しらねぇよ・・・俺の見舞いにでも来たんじゃねぇの・・・暇だったんだろ・・・？」

まるで何もしらないように軽く返す。その返しに鋳鶴君は激昂する・・・

「お前な・・・影太の何もしらねぇな！お前の為に学校休んでまでお前の為に何かしようとしてんだよ！あいつはいっつもごまかす！

危険な事になればなるほどだ！急用！？嘘にきまってんだろ！？暇だったから・・・？ふざけんな・・・お前にとって影太はその程度か！友達じゃねぇのか！」

「うっせぇよボケぇ！病院では静かにしやがれぇ！！！！」

激昂した鋳鶴君を横から顔にドロップキックがめり込みました。

「鋳鶴・・・病院で喚くな・・・うるさい・・・えぇ～と・・・荒神さん、貴方は医療費を支払わないといけないんだが・・・あんたの親と連絡がとれない上に貴方は保健証をもっていない・・・あなたが払うか貴方に怪我させた奴が払うか・・・どうする・・・？」

「・・・・・・・・」

「母さん、僕が払うよ！いくら！？」

蹴られた頬をさすりながら鋳鶴君は言う、

「１９万ぐらいだな・・・」

中学生では払えない金額です。これを払えと言っている鋳鶴君のお母さんの雅さんは慈悲がないのでしょうかと私も思います。

「だったら・・・その怪我させた人に払わせようよ・・・」

「それが荒神に恐怖心が宿ってしまって・・・答えないんだ・・・来た時には階段から転げ落ちたとかいうけど・・・荒神には殴られたあとや打撲の痕が大量にある・・・しかもこんな強さで殴れるのは男だな・・・私は例外だが・・・しかし・・・こういう患者は希

に見るカス野郎にやられた感じだな・・・珍しく腹が立った・・・」

「僕も相手が男だったら許せないよ・・・女の人でも許さないけど・・・電話だ・・・」

二人で話していると鋳鶴君の生徒手帳が鳴り出しました

「鋳鶴！俺だ・・・見つけた・・・三丁目の港町付近で影太を見た・・・早く来い影太に何か会ってからじゃ遅い、じゃあ早く来いよ！あいつは・・・荒神の為に喧嘩をするかもしれん・・・」

「だってさ・・・荒神さん恵まれてるじゃん、初めての友達が影太で一応僕の手帳渡しておくね影太にもしもの事があった時に役にたつと思うから！あと桧人の電話と繋げっぱなしにしておいてね！じゃ！行ってくる！」

「影太・・・俺は・・・」

誰かに救ってほしかった・・・

頼るものがあると私は弱くなってしまう・・・

だから私は今まで強くあろうとした・・・

でもそれが間違っていたとするのなら・・・

友達が欲しい・・・影太・・・・

その感情に割り込むように雅さんが話だす

「友達って奴はいいよな・・・あたしにも腐れ縁の友達って奴が居るけど・・・いざという時助けてくれる・・・そういう奴に会えなかった今までのお前私は不幸とは思わないが・・・お前にとって土村とかいうガキが初めての友達とするのならば・・・そいつを大事にしろ・・・さて・・・私は色々やることがあるからまた後で・・・」

ーーー三丁目港町郊外ーーー

「昨日の女！ボスあいつおもしろかったですよね～今は病院だそうですぜ？さすがボスだ」

柄の悪い男達の中の１人が中央に居るボスに話す

「ああいう奴はしばいておかねぇとな～後で厄介だぜ～？しっかし・・・傑作だったな～おもしろすぎてよ～！」

ボスらしき人が大声で高笑いする周りの柄の悪い人たちも一緒になって高笑いをする

そこに・・・一つの影・・・

それに気づいたボスらしき人が気づく

「おい・・・お前うちの人間じゃねぇよな～・・・・誰だ・・・？まさか昨日の女のダチとかいうんじゃねぇんだろうな～！」

「ボス～それはありませんよ～あのクソアマにダチが居るわけないっすから！あんな寂しがりやのお嬢ちゃんがさ！」

高笑い・・・心の無い言葉・・・黒ずくめの影が言う・・・

「・・・お前等は救いようのないクズだな・・・反吐がでる・・・息すらするな・・・このゴミ虫」

「あぁ・・・？誰に朽ちきいてんだ～？てめぇら～お客さんを存分におもてなししてやれ！死ぬほどな！」

柄の悪い人達が黒ずくめの影に襲いかかる・・・すると・・・

上から黒く約５Ｍとあろうかという鉄筋が何本も落ちた・・・

そしてその鉄骨は柄の悪い人達に降り注ぐ

「・・・貴様等・・・覚悟が出来ていないのなら・・・俺に近づくなよ・・・？死ぬかもしれないトラップを多数はっておいたからな・・・」

怒り・・・友を傷つけられての怒り・・・

静かに燃える怒りの炎、彼の目はそれ相応の目付きをしていた。

「てめぇ！警察呼ぶぞこらぁ！」

「・・・それはこっちの台詞だ・・・少女への暴行、名誉棄損それに加えて暴力、恐喝、銃刀法違反・・・貴様の様なクズが生きてて誰得だ・・・？誰得もくそもないだろう・・・俺は本気だ・・・」

「言わせておけば調子にのりやがってぇぇぇぇ！ぶっ殺す！てめぇだけはぶっ殺してやるよ畜生！」

手元にあった刀を鞘から抜き構えるボス、それを冷たく見る土村君、すると・・・

土村君の顔に鉄筋が直撃しました

「ボス～？俺の相手はこいつかい～？」

「おお！きたか！行け丸藤！」

「いぇっさ～」

大男が現れて土村君と相まみえますしかし・・・今の土村君は頭がぼうっとして頭から血が出でいますそこに大男の右ブロー、左ブロー右アッパー

もう蜂の巣にされています・・・見ていられる状況ではありません・・・

「ボス～？こいつ動かないぞ～？もう死んだんじゃないか～？いらね～や・・・」

「さてまだ痛めつけたんねぇな・・・斬るか・・・」

朦朧とする意識の中、土村影太は走馬燈を見た・・・

「影太・・・強い男にならなくてもいいが・・・人1人ぐらいは守

れる男になれ・・・お前はそういう男になればいい・・・誰か1人でもいい・・・大切な人を守り庇える位の男になれ・・・」

俺は・・・影だ・・・光じゃない・・・なにが急用だ・・・自分が情けない・・・この程度で・・・影は負けん・・・エロブリテッシュと呼ばれる紳士たる俺が・・・女を守れずにどうする！

俺は影！光になれなくても構わない・・・光の補助をするのが影！

親父の走馬燈を見るとな・・・

「ん～？起きたか～？もういっぺん寝てろ～」

大男の拳が影に落ちる・・・

しかし

そこに影は無く・・・男の拳はコンクリートの床の上に落ちた

「・・・俺は影・・・光が無くならない限り生き続ける・・・！俺は荒神麗花の影とならん・・・！大男相手などに・・・！負ける事はない・・・！」

「鋳鶴～・・・敵の援軍を叩くぞ～？」

「分かってるよ・・・手帳は倉庫内に置いてきた？」

「もち！」

「おいおいおい！二人だけかよ！？しかも中学生って！なめんんお

もたいがいにしろやぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

叫び声を上げる柄の悪い男、それを見る二人は相手を見ながら言った・・・

「おいおい、お兄さん達？たった１００人程度でいけるとおもってんのか？俺もなめられたもんだなぁ・・・行くぞ鋳鶴！」

「思いっきり暴れさせてもらうとするよ！」

倉庫内では影対大男がまだ闘いを繰り広げていた・・・

「なんであたらねぇんだ！おいらは最強のはずだ！」

焦る大男無理もない・・・あいては遥か格下しかも中学生なのに彼は防戦一方を強いられているなざなら彼は今、影になっているからだ

「・・・お前に負ける訳にはいかない・・・それに俺はお前より強い奴を二人も知っている」

彼が頭にうかべた二人は、赤髪の長身男の大親友と優しすぎる魔王と呼ばれていたいまでは家に６人の姉と２人の妹を抱える優男

「・・・それに・・・今の俺には守るべきものがある・・・か弱くて・・・・泣き虫で・・・弱虫で・・・傲慢な・・・奴が・・・そいつの為だけにでも・・・強くなれる・・・だから・・・守るために俺は貴様等を・・・彼女の影として・・・処分する・・・！」

「黙れ！黙れ！つぶれろー！」

手を振り上げ土村君を潰そうとする大男、

しかし・・・

影はそれよりも早く・・・早く・・・早く・・・大男の頭の上にのり、そこでポケットから取り出した爆薬を使い頭の上で爆発させる。その間約０．５秒もかかっていない・・・

迅影・・・１人の少女を守るためにたった今身につけた・・・影・・・

「・・・絶影とでも名付けよう・・・耐える影・・・目では追えぬ・・・迅速なる影・・・さぁ・・・後はお前だけだ・・・影に狩られる前に逃げるか・・・？さぁ・・・どうする・・・？」

「けっ！俺には奥の手がある！野郎共！出てこい！」

扉が開き、そこには・・・外で待っていた１００人の部下が・・・居ませんでした～♪代わりにそこには優しい魔王と赤髪の不良が居ました。

「なんですか～？俺達に何か用か～？」

「馬鹿な！ふざけんな！なんで・・・！？」

「貴方はゲスだ僕は今貴方を八つ裂きにしたい程に自分でも分かるぐらい激昂していますよ・・・でも・・・影太の言うとおり・・・逃げたらどうですか・・・？僕はそっちをオススメしたいと思いますけど？」

「畜生・・・！畜生！！！！！！！！！！！！！今日

はここまでのしといてやる！憶えてやがれ！」

裏から逃げるボスらしき人凄いだっさいです・・・まさに雑魚悪役って感じです。

しかしその扉の向こうには・・・

「お客さん～？医療費払えやこらぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

こうして悪い人はとっちめられ、警察に送り届けられたそうです

「あ～土村～一応いっとくけど俺と鋳鶴は喧嘩しに来ただけだからな～？」

「久しぶりの喧嘩は身体に応えるよ～・・・じゃあ僕は桧人と帰るね～また明日学校で～」

「・・・コクリ・・・」

影は思った・・・俺にはこんなに良い友達がいたのだと・・・普段は言えないが今なら言える・・・

「・・・ありがとう・・・」

それから一ヶ月後、荒神さんの怪我は完治し学校にもまぁまぁ来る

ようにはなりました。

「おっ〜す！土村〜！治ったぜ〜！望月も赤神もありがとな・・・」

「・・・うるさいのが増えた・・・」

「礼なんていらねぇよ・・・それより・・・俺は喧嘩して小遣い引かれた〜！今月俺死ぬだろ〜・・・・」

「僕も母さんに怒られたよ・・・殺されかけたよ〜・・・」

愚痴をいう3人・・・幸せそうな一人・・・

これが嘘つきスケバン狼少女とエロブリテッシュが友達になった記念日になるのでした・・・

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

そして今・・・

こうして二人で帰宅道も一緒に帰っている・・・

俺は幸せ者だ・・・今の俺はこいつのおかげでここまでなれた・・・

そして嘘つき狼少女は伝える・・・一つの言葉を・・・初めて言うその言葉を・・・

「土村・・・」

「・・・？」

「ありがと・・・♪」

「・・・？」

「なんでもねぇ～よ！ほら！次は抹茶アイスだ！」

これは二人のお話・・・

嘘つきスケバン狼少女とエロブリティッシュのお話

番外編：嘘つきスケバン狼少女とエロブリティッシュ（後書き）

nです！悩んだ末番外編にしました！かなりの長文になってしまいましたが最後まで読んでいただけたら嬉しいです！次回は二十話かな・・・・・・・？

第２１話：魔王と鬼（前書き）

二年前の事を口走ってしまった我等が主人公望月鋳鶴君、それにぶち切れてしまった普通科最強の不良・城屋誠さん、彼の拳に一撃で地面に倒れ込む鋳鶴君、この普通科歴史史上最悪の喧嘩が幕をあげました。

第２１話：魔王と鬼

「鋳鶴、てめぇはよ人の人生に口出しすぎだぜ？人よりまずお前は自分からだろ？自分の人生もまだなんともなっちゃいない奴に俺は指図されて素直にそうしろと？それは都合が良すぎじゃねぇか？」

疑問符を付けて語りだす城屋さん、それを聞くことさえ出来ない鋳鶴君。

それを見て鬼は言う

「もうくたばっちまったのか？俺に喧嘩売るのはお前じゃ無謀なんだよ・・・とにかく人の子と何も知らないお前がその人の人生に感情移入したし干渉すんじゃねぇよ・・・まぁ・・・お前だからここまでにしてやっているが・・・普通の奴やお前のダチなら・・・即病院送りにしてるぜ？まぁ、聞いてないっつうか・・・聞けねぇか・・・」

鬼は笑いながら言う。

自分の人生の黒には鬼でも触れてほしくはない。

一撃で決まる様な右ストレートだったらしく鬼は自分の手を見つめている。

立ち去ろうとする鬼の後ろで元魔王は立ってみせた。

「はぁ・・・はぁ・・・もう勝ったつもりか・・・？君のパンチはその程度か！」

ーーーー立ち上がった・・・？俺のしかも鳩尾に確実に入れ込んだ拳を・・・？手応えはあった筈だ。
あれは完璧だった！鬼の力も使った！常人では骨が粉砕される程の拳をさらに鳩尾、下手すりゃ死んでる！それなのに何であいつは立ってんだ！？ーーーー

城屋誠の心の中は錯乱していた
。
今までにないほどの絶好の隙の間に入れ込んだ自分の拳が相手にはまったく聞いていない。
相手は中学生なうえ自分は右手を鬼化させてまで殴った全力の拳を自分の喧嘩相手はその拳が入ったにも関わらず立っている。

「僕も・・・往生際が悪くてね・・・死んだかと思ったよ・・・でも君が殴ったのはコンクリートの板だよ・・・でも・・・分厚い板があっても・・・鳩尾に入るなんて・・・ゴホッ！！！」

鋳鶴君の服の中から粉砕されたコンクリートの分厚い板が出てきました

「初めて・・・絶好のチャンスでトドメさせなかった奴は初めてだぜ？しかもコンクリートの板があったとしても肋が折れるほどのピンポイントで殴ったんだがな・・・
お前が初めてだよ。光栄に思えよ？」

「思えないな・・・君が大会にでてくれるまで・・・僕はノーベル賞取ったって喜ばないと自分でも思うよ？」

「大層な事言いやがる・・・俺は出ねぇぜ？じゃあ俺は体育大会出てグラミー賞貰えると思ってもでねぇよ？じゃ条件を付けて良いか？お前が全力の俺に勝て！以上！」

「じゃあ・・・！勝つよ！」

勝つ見込みは無い、しかし一矢報いる事は出来る。

それは普通科生徒でも出来ること。

鋳鶴君はそこでふと思いつきました・・・相手は鬼とはいえ一応は人間それならにんげんには身体的ダメージを与えられるもの銃は効かない・・・ならそうだ！

この前理科で習った爆弾を作ろうと鋳鶴君は考えた

幸いこの陽明学園の理科室は各科にあるのだが基本的に物質が完備されておりもちろん色んな実験をしたりするのでその薬品の量や種類なども豊富です。

でもまぁ・・・普通科には普通の薬品しかありませんけどね～・・・

「爆弾でも作るか・・・グリセリン　農硫酸　農硝酸はあるだろうし・・・理科室までダッシュ！」

「鋳鶴！逃げるきか・・・？歩いてついて行くか・・・どうせ魔王でもねぇあいつに俺が負ける訳ねぇしな・・・」

「歩いてる・・・？でもやっぱり城やんは油断してる・・・今しかないな・・・早く作らないと・・・」

そんな急いでる鋳鶴君の事はさぞ知らず城屋さんはベンチで寝そべ

って空を見上げてます」

「二年前か・・・ずいぶんと懐かしいなおい・・・あん時はまだ鋳鶴も俺も魔法科の時だったか・・・姉ちゃんにも足があったしな・・・」

ーーーー二年前ーーーー

「はぁ～・・・火気魔法操作とか・・・やってらねぇよ～・・・んどうした？姉ちゃんもサボリか？」

魔法科校舎の屋上で魔法授業をサボる城屋さん、いつも通りにサボっていると反対側の魔法科の校舎から1人の生徒が浮遊術で城屋さんの隣に来ました

そんな城屋さんの隣には黒く艶やかな髪を頭の後ろで結ったとても城屋さんに近づく女性とは思えないほど綺麗な女性が座っていました。

「誠？少しは授業うけなさいよ！お姉ちゃんが怒られるんだから！」

その綺麗な女性は城屋さんを誠と呼ぶ。
周りから一連の会話を聞いただけで姉弟なのである。
しかしあまりに似ていない
黒く艶やかな髪清楚な姿、彫刻と見間違えるほど完璧な身体に周りを和ませる雰囲気放っている。
確実に１０人いや、１００人は彼女の事を美少女と発言するであろう

しかし

弟はというとりるからに魔法科でいう不良、劣等生の顔立ち服装、頭髪をしている

１９０ｃｍはありそうな身長に切れ長の目、金髪で整っていない髪に乱れに乱れた着こなしの魔法科の制服、彼は姉とは正反対の性格に容姿。

おそらく確実に１０人、１００人、もしくは１０００人以上の人間が見ても不良にと言うであろうほどの容姿をしている。

「あのね誠！お姉ちゃんはね？誠の事心配してここに来たのよ？また喧嘩したって先生方から聞いたし・・・どうしてすぐに喧嘩しちゃうの？いとこの瀬尾君や剛君は見た目は悪い男の子だけどあまり喧嘩したって聞かないし・・・」

「俺をあいつ等みたいな馬鹿と一緒にすんな！しかもここは愛知！あいつらは東京と大阪だぞ！？喧嘩しないとか言っても普通の人間が行くような高校入ってあの二人が喧嘩すると思うか！？」

猛反論する劣等生弟しかしお姉さんにはいつもの事です。

「誠？普通科を馬鹿にしちゃ駄目、普通科にも凄い人はいっぱい居るし二人は陽明じゃなくてあえて普通の学校を選んで二人とも大学生になってるじゃない？誠は普通科じゃ駄目な方なんだから・・・お姉ちゃんが先生達に頼んで魔法科に編入したのに・・・」

「俺がいつ頼んだ！そういうのをなぁ！そういう所がうっとうしいんだって！お節介とかいう言葉とかしらねぇのか！？姉ちゃんは折れと違って優等だし！ひとに優しくできるし！あんたのそういう所

が嫌いだよ俺は！お人好し！」

「ほめて貶して・・・いつからそんな子になっちゃったのかな・・・お姉ちゃんかなしい・・・」

泣き始める城屋さんのお姉さんこれではもう完全に城屋さんが悪者になってしまいますかね～・・・まぁ見た目も言動もすっかり悪者ですが・・・

「でもね？お姉ちゃんは知ってるよ？誠は良い子だよ！お姉ちゃんが保証します！うん！」

右手を掲げ城屋さんの事を褒めるお姉さんそれを隣で見ている城屋さんは恥ずかしそうです。

「やっぱ姉ちゃんにはかなわねぇわ・・・色んな意味で・・・」

こうしてその二ヶ月後お姉さんは足を失う事となる・・・

「あの日から・・・俺は何も変わっちゃいねぇ・・・自分勝手で・・・わがままで・・・何か変わりてぇよ・・」

するとベンチで寝転がっていた城屋さんの前に先ほど逃げたはずの鋳鶴君がきました

「城やん！決着をつけよう！君に勝てばいいんだよね！約束は守ってね！」

「もちろんだ！俺は嘘をつかねぇ・・・嘘なんかついたら自分で自

分の腹を斬る！

城屋さんの顔には怒りはもうなかった・・・

ーーーこいつと喧嘩すると・・・自然とわらっちまう・・・なんでだ・・・姉ちゃんがの時と一緒だ・・・こいつには殴りたくなんかねぇし・・・泣き顔とかもにあわねぇか・・・ってもの・・・勝負は勝負！自分にはけじめつけぇと！ーーー

「僕は君に特攻をしかける！」

すると鋳鶴君は制服を脱ぎ出しましたそこには・・・

魔法科にしかない対魔法装甲を全身につけ全身にダイナマイトが付属されていました

「おまっ！馬鹿か！そんなもんで俺に特攻しかけたらここら周辺が消し飛ぶぞ！？」

「構わない！普通科が勝つためだ！後悔はしない！嫌なら負けを認めろ！そうしないと普通科もろとも吹き飛ばすぞ！」

これが手段を選ばないという事でしょうか・・・

もう今の鋳鶴君は主人公ではありません、どっからどうみてもただのテロリストです

しかし・・・

その覚悟を見て城屋さんは決めました

「分かった・・・もういい・・・出るから！体育大会でりゃいいんだろ！？出てやるよ！でもよ！どうなってもしらねぇからな！？」

「城やん・・・ありがとう・・・」

城屋さんのその言葉に涙が出そうになる鋳鶴君、その時でした。
彼のポケットにしまってあった一つのボタンがポチッという不気味な音をたてました

「城やん・・・どうしよう・・・ぼっ・・・ボタン押しちゃった・・・♪」

「はぁ！？何してんだ！校舎が吹っ飛ぶ！つか俺も吹っ飛ぶ！」

慌てるる二人、どうやら喧嘩は終わったようですだれも居ない運動場で二人で馬鹿騒ぎしています。
城屋さんはダイナマイトが爆発しそうなのにたいへん楽しそうです

そして最後には城屋さんが鋳鶴君の全身についていたダイナマイトの導火線を全部きってあげたそうです

第２１話：魔王と鬼（後書き）

第２１話！更新がだいぶ遅くなってしまいました・・・
まだまだ次回は考え中です・・・
感想など貰えたらうれしいです！
でわ～

第２２話：魔王と鬼との喧嘩後（前書き）

鳩尾のダメージのせいか立つことがやっとの事の鋳鶴君、保健室に運ばれるそうです。そこでも傷を癒せないと知り・・・

陽明学園の中央保健室に行くことになりました

第２２話：魔王と鬼との喧嘩後

「いたた・・・闘いってこんなに痛かったのか・・・城やんのパンチはおかしい・・・！鳩尾のダメージがおかしいよ！？あぁ～！折れてる！絶対折れてる！もうやだ～！」

痛そうにお腹を抱えながら鋳鶴君は悲痛の叫びをあげています
情けないです・・・これが主人公ですよ・・・？

「いちいちうっせぇな！中央保健室にでも行くか！？しかもそこまで全力で殴ってねぇし！折れてたら息できなくなっとるわ！」

「えっ・・・？」

その言葉に一瞬息吸うのと言葉を失う鋳鶴君

「中央保健室！各科でも処理しきれないほど重症の患者が行く所だよ！確か～・・・お前の姉ちゃんが居たきがすんだけど？」

「え・・・？穂詰姉はまだまし・・・ちょっとまって・・・・？治った！治ったよ城やん！やっぱり痛くなかったよ～♪」

よかったですね～♪
しかしそんな負け惜しみで治るはずもなく
すると腰が砕けたかのように膝をガクリと落とす鋳鶴君

「ほら？たてねぇだろ？さっさと行くぞ！」

「嫌だ！ちょっと！嫌だってえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ・・・・」

嫌がる鋳鶴君、少しは男を見せてくださいよ・・・

もぬけの空となった普通科校舎から５ｋｍ先、そこには大きな赤十字のついた病院らしき施設がありました。

陽明学園中央保健室病院

陽明学園各科には各科何処にも保健室、医務室がある。
しかしこの中央保健室病院ではそこでは治療しきれていない程の重症を負った生徒や教員が通う場所なのである。
先生は女の人しか基本居ませんしかしたまに男の先生の時もありますまぁ・・・この学校の保健室はわざと怪我してでも来たい生徒が居るらしいですしねぇ・・・

ちなみに主治医は望月穂詰＜もちづきほつみ＞である。

この病院は屋上からも入ることができ、普通科生徒や銃器科生徒は保健室の前のゲートを通ってきますちなみに魔王科の人は魔王科にも保健室病院があり普通科ならばゲートから入るのですが城屋さんは二年前まで魔法科でしたので屋上から浮遊魔法で病院に入りました

そして二人は医者の先生の部屋で立ち止まり診察を受ける順番になりました・・・
はたして！そこにはどんなナースが！

「あら？城谷君？どうしたの～？鋳鶴まで居るじゃ～ん♪」

そこには酔っぱらった女医が居ました

「穂詰さん・・・院内で酒はやめましょうよ・・・つか・・・服ちゃんと着ろよ！」

「そんな事いっていいの～？君が半殺しとか殺しかけた人の治療をしたのは誰だったか～？忘れたとは言わせないわよ～？」

そうですこの酔いどれ医者は城屋さんが今まで良い意味で制裁・・・悪い意味で暴力を振るって傷つけてしまった人を治してきた人です。

しかし服は着崩さないでほしいものです・・・
思春期の男の子は色々大変なのですから・・・

それに女の子もぶら下がるふたつのメロンにすら～っと伸びている毛穴をも感じさせない足・・・
そんな目の前のわがままボディを不覚にも視界に入ってしまったら確実に自分のと比べて自分に失望する事でしょう・・・
でもまぁ・・・これでも医療は完璧な人です武道も嗜んでいるので肉つきが良いのでしょうか・・・
勉学は・・・聞かないでおいてください・・・

「はいはい・・・鋳鶴！？ほら！出てこい！」

「体が痛くて歩けませ～ん・・・」

またわがままを言う鋳鶴君、ほんっと情けないですよね～・・・
こんなのが主人公ですいませんホント・・・

「鋳鶴～？高橋ちゃんに診て貰うから～♪私忙しいしぃ～♪は～い次の人～♪」

「えぇ！？高橋さんはちょ・・・ちょっと・・・」

冷や汗をかきながらほんの１０秒、医務室の扉から白衣を着た人が入ってきました

「私に何か不満があるみたいねぇ～・・・失礼しちゃう！」

そこにはツインテールのみるからに中学生ぐらいの女の子が居ました・・・

しかしもの凄い気迫です・・・

「いや！？無い！無いから！うん無い！無いったらぁぁぁぁぁぁ・・・」

奥から出てきた女の子は高橋凜さん、この陽明学園が誇る世界最年少のお医者さんです。

「喧嘩～？ふざけてんじゃないわよ！何であんたの傷を私が治すの！？歩とラブラブしてチュッチュッしてヤってとっとと治せば～！？ホント馬っっっ鹿みたい！馬鹿！」

もの凄い罵倒です・・・しかも背はあまり高くない高橋さん、危ないおじさんに好かれそうな性格してますねぇ～・・・

というか・・・発言内容が危ないのですが・・・

「あっ・・・うんごめん・・・君の手を煩わせるつもりは無かったんだ・・・」

冷静に対処する鋳鶴君、そんな冷静かつ弱気な見て少し顔を赤らめる高橋さん

「ホント馬鹿！あんたみたいな馬鹿嫌いよ・・・もぅ・・・」

「でも歩の名前出すのやめてくれない！？もう・・・怒られそうで・・・」

そういうことが禁句とは知らない鋳鶴君そこは普通労いの言葉でしょうよ・・・

ありがとうとか・・・

「鋳鶴・・・去勢してあげようか・・・？今ならタダで女の子のなれるわよ・・・？」

「やめて！？高橋さん！？やめて！？僕が女の子になって誰得！？僕損でしょ！？」

「あんたが苦しめばいいのよ・・・！あんたが苦しめばねぇ！？」

般若のような形相で鋳鶴君に巨大な鋏を突き付けます

鋳鶴君はパニックしかけていますが・・・

あえて冷静にかつ弱々しく高橋さんの目を見ながら言葉を返します

「凜・・・頼むよ・・・君が頼りなんだ・・・治して・・・くれないかな・・・」

甘い言葉というか弱々しい声をかける鋳鶴君、完璧にナンパ感丸出しです・・・

というか・・・わざとらしい演技です。

治療とか嫌だこうだとか言った人がこんな事言うと思います？

「・・・仕方っないわねぇ・・・治してあげるわよ！治してあげればいいんでしょ！？あ～！もう！うっとうしぃ！」

ぶつぶつ言いながら鋳鶴君を診察していく高橋さん
ツンデレは素晴らしいですよ！立て！国民よ！ですよ！
それにしても鋳鶴君と高橋さん、二人の関係は？というと・・・

高橋さんはこの小説の某ヒロインの三河さんのお友達でその三河さんとは昔っからのお友達頼るか頼られているかというと・・・五分五分らしいです
三河さんとは剣道の試合の時などで怪我をしたら治して貰ったりしているそうです

昔は鋳鶴君の彼女だったという噂も・・・

「鋳鶴～あんた変わったよね～・・・昔はさ～・・・赤髪でさ？私は今でも金髪だけどさ・・・あんときからえらい変わったよね・・・」

昔の事を思い出しながら語り出す高橋さん、

「あ～・・・あの時？凜も素直だったよね～・・・僕の彼女だったんだっけ？」

とんでも発言が出ちゃいました

「んなぁっ！あん時は私は馬鹿だったの！それに・・・不良好きだったし・・・つか鋳鶴！あんたは彼女作りすぎなのよ！どんだけいたっけ！？あんたが魔王の時よ！

今の普通科の委員長全員手玉にとってくれたわよね！
歩も手玉にとって！弄んで！ヤってたでしょ・・・？」

「凛とは～・・・あったかな・・・？歩とはないよ！？絶対にそれだけはない！断言できるよ！？僕はまだ魔王とか言われてたしね・・・」

「そんなに殺されたい・・・？」

冷たく殺気に満ちた声色が診察室に響き渡ります

「でもさ・・・今じゃああの頃と違って少しは変われたと思ってるよ？
赤髪だったし・・・それなりに喧嘩もしてたしね～・・・彼女は～・・・言わないでおこう・・・なんか殺されそうな気がする・・・」

「そうね・・・あやうく私も鉈だす所よ・・・？それにしてもまぁ・・・草食になったものね～・・・肉食が草食になる事なんてあるのかしら・・・」

「僕？僕はお肉好きだよ？」

「そういうことじゃないぃっ！
肉食系がなんで草食系になるかきいてんのよ！」

「なんでかな～・・・自分もかなり変わったと思わないんだけどね・・・」

「まぁ・・・そんな事はどうでもいいわ・・・
妹の～・・・ゆりちゃんと神奈ちゃんに感謝してる？

それと！勿論私含む委員長やあんたの家の人に歩や赤神達あと今日はここに連れてきてくれた城屋さんにもね！あんたはみんなに迷惑かけてきたんだからね！？」

厳しくも優しい言葉をかけてくれる高橋さん。
鋳鶴君は色々迷惑かけましたからね～・・・・
校舎の一部丸々掻き消したり・・・・
まぁ色々してたんですねぇ～・・・・

「みんなには感謝してる・・・
だからまぁ・・・家では恩返ししてるつもりはないけど家事や洗濯、家計管理もちゃんとしてるしね！
褒められた事ないけど・・・・」

「ちゃんとあの子のお墓のも行ってる・・・・？
こんな事聞くのは野暮だと思うけどね・・・それがあんたが魔王になってしまった事に変わりはないんだから・・・あんたの・・・・」

「それ以上はシ～だよ・・・・？
口で口を塞いじゃうよ・・・・・？」

高橋さんの耳元でヒソヒソと言う鋳鶴君、それにビクッと反応し顔を急激に赤らめる高橋さん、
魔王はまだ健在のようです。

「お前！歩というものがありながら私に手出すなんて最低！！！！！死ねっ！死んじゃえ！」

「いっ・・・・医者の言うことじゃない・・・・・」

「もう治ったでしょ！帰りなさいよ！」
真っ赤なお顔の高橋さん、しかし鋳鶴君の傷はいつのまにかきちんと癒えていました。
さすが
陽明学園が誇る世界最年少のお医者さんです
あっ最年少は余計でしたね

「凜、ありがと！助かったよ！また怪我したらお願いね～！」

「逃げながら言うことかー！今度きたら絶対治療なんてしてあげないんだからね！？
馬鹿鋳鶴ー！！！！！！」

「んで？なんとか治療は終わったのか？
まぁ・・・なんだ・・・俺もやりすぎた・・・まぁ・・・明日からは会議にも参加してやるよ・・・大会にもでるしな・・・」
城屋さんに担がれての帰り鋳鶴君はやっと動けるようになりました
「でもさ・・・久し振りに喧嘩して疲れたな～・・・体がなまってるね」
「俺もだな～・・・今日は姉ちゃんと飯食いに行くからこの辺でな～」
「えぇ！？まぁいいや城やんありがとう～」

城屋さんも羨ましいですね～・・・可愛いお姉さんと食事ですか・・・

羨ましいですね～・・・

しかし普通科の校門近くで降ろされてしまった鋳鶴君、もう日が沈みかけています

「今日も終わりか～・・・早かったな～・・・体育大会まであと二週間か・・・長いような・・・短いような・・・」

そんな事を考えていると胸ポケットに入っていた生徒手帳がなりはじめました

妹さんからの電話でした

「神奈から・・・？なんだろ・・・もしもし？」

「お兄ちゃん今どこ！？ご飯が出来てないよぉ～・・・

恐子姉がお腹ペコペコで死んじゃうよ！早く来てー！」

なんと長女恐子さんがお腹を空かせてまっているではありませんか！

しかし慌てる妹に対して鋳鶴君は

「じゃあ～・・・恐子姉にばれないように屋上に行ってそこに倉庫があるからそこからカップ麺とお菓子あるからそれを食べさせてあげて、分かった？」

「うん！任せて！私がんばる！」

生徒手帳の通話を切りゆっくりと家に帰ろうとする鋳鶴君、

「・・・い・・・・づる・・・・・・」

「・・・・・!?・・・・・」

背筋が凍る・・・

その声は昔彼を魔王と名乗るまでに貶めた原因いや・・・

彼が失った大切な人の声が聞こえた

しかしその声には生気がない

彼女はしんだ・・・生きている筈がない・・・確認のため自分の背後を瞬時にみる

そこには何もなかった・・・

だがその大切だった人の声は確かに自分の声を呼んでいるかのように聞こえた

「沙綾・・・」

大切だった人の名を呼んでみる・・・

返事はない・・・

ただ風が吹いていただけ・・・何もない・・・

「そんな訳・・・ないか・・・」

胸ポケットに入れていたペンダントを開きもう一度大切な人の死を確認して望月鋳鶴は再び歩き出した

ーーーー陽明学園魔法科某所ーーーー

魔法科某所
その黒く明かりは蝋燭の炎しかなくなんとも妖しい雰囲気の会長室
虹野瀬さんと寿さんがあやしいお話をしていました

「有町沙綾？なんですのその女は？」

「魔王君の昔の女よほら居たでしょ？二年前この学校で目立ってた女の子よ」

「天才少女とか言われていた子でしょう？確か死んでいましたわね？」

「そうよ？不慮の事故で・・・死んだらしいわね・・・」

「それが彼の一時期だけ、魔王になっていましたわね」

「でも・・・すぐ冷めてしまったわ・・・彼は現実に戻ったのよ・・・」

「魔王かしたら戻れない筈では・・・彼に何かありましたの？」

「さぁ・・・？私にも分からないわ・・・でも彼はその内また魔王になるわ・・・私が彼を魔王にするもの・・・フフフフフ・・・」

「魔王は私の駒でしてよ！？勝手に自分のモノ発言はやめてもらえ

るかしら！？」

「そうね・・・でも争奪戦なんて馬鹿な真似はしないわ・・・
それに今日は眠いし・・・私は寝させて貰うわ・・・おやすみなさい・・・」

「縒佳！？まだ話は終わっていませんわ・・・私も寝ましょう・・・・」

蝋燭が消え部屋は真っ暗になり
陰謀渦巻く中・・・
望月鋳鶴は何もしらず・・・家への帰路を辿るのでした・・・

第２２話：魔王と鬼との喧嘩後（後書き）

第２２話！如何だったでしょうか！しかし・・・今回は長めで一週間も開いてしまいました・・・・まぁ忙しいですがまだまだかいていきます！感想等々もおねがいします！

第２３話：魔王とはらぺこ長女（前書き）

家に帰る途中でかかってきた電話なんと望月家長女の恐子さんがお腹が空いて死にかけているという情報が！
鋳鶴は内心呆れながら家に向かいます

第２３話：魔王とはらぺこ長女

「しっ・・・死ぬ・・・・・」

只今望月家では長女の恐子さんが栄養不足というか・・・
お腹が減りすぎて死にかけています
今は悶え苦しんでいる所です

「神奈ー！カップ麺まだー！？恐子が栄養失調で死ぬぞー！？」

恐子さんの様子を覗いながら内心心配そうにしているのは次女の安奈さん、
一応恐子姉だとか・・・姉さんとかつけましょうよ・・・

「ちょっとまってー！あっ！お姉ちゃん駄目だよ！それは恐子お姉ちゃんのなんだから！
」
「え～・・・私もお腹空いたもん・・・恐子姉ちゃんだけずるい～！
神奈～私も食べたいよぅ・・・」

今必死にカップラーメンを山ほど作ってるのは八女の神奈さんです
一番望月家ではまともだと断言できますね
そのラーメンを作ってる隣で自分のラーメンを確保しようとしているには七女のゆりさん
望月家では一番おてんば・・・とでも言っておきましょうか・・・
彼女は長女である恐子さんがひいきされていると思っているのでしょうかなり必死です

ーーーお姉ちゃん・・・可愛い・・・！ラーメンそんなにほしいん

だね！？
でも許して・・・お兄ちゃんに頼まれたの・・・ごめんね・・・・・ーーー

「駄目だよお姉ちゃん？
恐子お姉ちゃん死んじゃうかもしれないんだよ？
だから我慢しようね？ね？」

「仕方ないなぁ～・・・神奈が言うなら我慢するよ～・・・・」

どっちが姉だかわかりませんね～・・・
呆れたものです・・・
先ほどの一番まともは無かった事にしてください・・・
神奈さんは超がつくほどのシスコンでブラコンでした・・・

「恐子お姉ちゃん～？出来たよ？
早！もう5つなくなっちゃった！」

「もっと・・・もっと・・・・飯を・・・・・！
私に・・・！飯を～・・・・」

顔が青ざめ呻き声をあげる恐子さん、もう死にそうです

「冴子姉は今日は帰ってこないって・・・
お兄ちゃんはまだなのー！？」

神奈さんはもう限界って感じです
その限界が爆発しかけた時玄関が開きました

「ただいま～・・・

今からご飯作るからあと5分まっててね～今日は朝つくっといたから～」
「お腹空いたよ～・・・ギターを弾く元気もないよ～・・・」

「鋳鶴っ！
怪我は大丈夫なのか！？
私は弁護士なんだ！最低限の弁護はしてやる！」

「飯・・・・・・・・」

「お兄ちゃん～・・・」

「神奈～・・・よく頑張ったな、兄ちゃんは助かったぞ？
みんなもありがと恐子姉今作るからね！」

「お・・・おう・・・」

労いの言葉に対して返事すら返すことすら難しくなっている恐子さん
ゆりさんと神奈さんの頭をなでなでしてあげています
それを見て黙々と料理を作り出す鋳鶴君、お母さんってあんな感じですよね～
今日のご飯はイタリア料理だそうです。
鋳鶴君は家庭科と体育が5段階評価のうち5なので運動神経は抜群ですし家庭的能力も子持ちのお母さん以上の腕前です。
ちなみに知識も豊富で人の体の仕組みや病気や健康の事などもお母さんが世界的なお医者さんなのでそういう事は言えにある本で憶えています。
家庭科の知識はいつも家事をしているのでまぁまぁ万全です
なんやかんやしているうちに
5分が経ちました

「今日はイタリア料理で～・・・もう食べてるし！
恐子姉はこっちのやつね？みんなのは食べちゃ駄目だよ？」

「わかっ・・・ている・・・！」

「お兄ちゃんおいしい～♪」

「いつものおいしい味だね♪」

「苦労をかけるな・・・まぁ・・・母さんが帰ってこないのも悪いが・・・
あの人に料理させるよりはましだしな・・・」

望月母はどんな料理をするのでしょうか・・・
それにしても恐子さんはもの凄い食べっぷりです・・・
何？食べるんでしょうか・・・
妹二人と珍しく褒めてくれた安奈さん鋳鶴君にも笑みが溢れます
するとまた玄関の扉が開きました

「ただいまぁ～！穂詰ちゃんが帰って来たぞー！」

飲んだくれがやっと帰ってきました

「うわっ！酒臭っ！早くお風呂！早く！」

「仕事多くてさ～♪高橋ちゃんに押しつけちゃった～♪」

てへっ♪という感じを彷彿とさせるポーズをとる穂詰さん、
正直これを高橋さんが見たらブチキレそうです・・・

「梓はいつもの通り居ないと・・・
冴子姉と真宵姉は今日も帰ってこないか・・・
そろそろ帰って来てくれないかな・・・」

「そうだよね・・・みんな揃うことなんて中々ないもん・・・お父さんが一番忙しいし・・・
みんなでご飯食べたいな・・・」

泣きそうになる神奈さん、恐子さんが神奈さんの頭をなで始めました

「私たち普通の家族にはほど遠いしな・・・
まぁ・・・私はいつも帰ってくるからな・・・まぁ安心しろ・・・
！絶対全員揃って飯を食える日がくる・・・私がいうんだ信じろ・・・」

こういう時はちゃんと良いことを言ってくれる恐子さんなんとも頼もしいですねぇ・・・
そんな感動している話に浸っている中
あの飲んだくれが走ってお風呂から出てきました

「ちょっと！テレビ！テレビつけて！早く！！！

お父さんは生きていますよ～
えぇ～と、とにかく近いうちには帰れそうだから～雅にもよろしく言っておいて～」

ニュース番組でカメラマンのカメラを奪い望月家の馬鹿親父は家族に自分の生存を報告していました
ちなみに・・・望月家の大黒柱は公務員です・・・
日本滅亡まじかです。

「おっ・・・親父・・・」

「頭痛くなってきた・・・私は寝る・・・」

「お父さん・・・何してるの！？」

「そんな事どうでもいいじゃん！神奈～お風呂はいろ～」

皿洗いをしながら親父さんが映っているテレビをみつめる鋳鶴君
恐子さんがやっとご飯を食べ終わりました

「恐子姉に食べて貰うとさ作りがいがあるね」

「私は・・・食い物は何でもくうしな・・・
それにお前の作る飯は正直言って旨い・・・悔しいがな・・・
後は長男なんだからな・・・一応・・・
それにそのうち真宵と冴子も帰ってくるだおう・・・・・まぁ・・・
嫌でもあの馬鹿のニュースは見ただろうしな・・・」

「神奈が一番苦労してるよね・・・末っ子だし・・・・なにより神奈が一番家族を好きだしね・・・」

「そうだな・・・
私達は基本忙しい・・・家には鋳鶴と神奈とゆりと私しか居ないこととかもあるしな・・・
安奈は弁護士、穂詰は陽明の代表校医、梓は留学中、真宵は軍に入っていて・・・
冴子は魔王科大将・・・
馬鹿は特殊公務員だし母さんは世界の医者だしな・・・帰ってこれないのは当たり前か・・・」

「僕がみんなを繋ぐよ・・・家族をね！」

偉いことを言う鋳鶴君、
頭の上に恐子さんの優しいチョップが落とされました

「じゃあ・・・頑張れ・・・
明日は白米倍増な・・・？」

「倍増！？お米なくなっちゃうよ！？」

「長男なんだ・・・それぐらいしてみせろ・・・♪」

恐子さんがいつもは
死んでいるような目が垂れ下がりそこには笑顔がうまれていました

「恐子姉が笑った・・・・！？
まぁ・・・一応頑張ってみるよ・・・」

今日もなにやら騒がしい望月家でした

第２３話：魔王とはらぺこ長女（後書き）

第２３話！いかがだったでしょうか・・・！
感想等頂けたらうれしいです！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1527x/

優しい魔王の疲れる日々

2011年11月20日21時41分発行